

東方氷災録

魔神王

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

テンプレどうり転生した主人公。

転生した世界で好き勝手暮らす主人公。

これはそんな主人公の一生を書いたハートフルストーリー（嘘）

※描写、心情等下手、ドヘた

※R15、残酷な描写、アンチ・ヘイトは保険です

※小説家になろう様にも投稿してます

それでもいい方はゆっくり読んでいってね

目次

この作品を読むにあたって	1
番外編『東方博麗伝』とのコラボ！	
前編『少年』	5
中編『雪山』	8
後編『竜王』	12
番外編『東方波動郷』とのコラボ！	
前編『遭遇』	16
中編『蓮君の修行』	20
後編『終わりは始まり』	23
第一章超古代都市編	
よくあるプロローグ	26
よくある展開	30
よくある展開 (その2)	33
よくある永琳の家	36
よくある試験	40
よくある試験 (後編)	43
よくある日常	46
よくある体力テスト	49
よくある会話	52
よくある卒業試験	55
よくある卒業試験 後編	58
よくある人妖大戦 ①	61
よくある人妖大戦 ②	64

よくある人妖大戦 ③ | 67

閑話集 一

閑話 ① 『転生の団』 | 70

閑話 ② 『力を持つ成金と不運な転生者』 | 72

閑話 ③ 『都市の整備士 吉田の一日』 | 75

第二章 放浪編

第一話 『修行と進化』 | 78

第二話 『希望となりうる者』 | 82

第三話 『よくある話』 | 85

第四話 『謎の軍勢』 | 88

閑話集 二

閑話 『陰謀』 | 91

第三章 ちよと変わった諏訪大戦

これまでのあらすじ | 94

第一話 『戦争』 | 97

第二話 『神』 | 100

第三話 『理由』 | 103

第四話 『Q・ダンジョン攻略で最もやってはいけないことは？』

107

第五話 『かつての敵』 | 110

第六話 『フォル』 | 113

第七話 『黒森』 | 116

第八話 『洩谷 諏訪子』 | 119

第九話 『神奈子』 | 122

第十話 『天照大神』 | 125

第十一話『妖怪の王と氷を司る男』	128
第十二話『死』	131
第十三話『絶望』	134
第十四話『戦いの終わり』	137
第十五話『宴会』	140
第十六話『旅』	143
閑章	
閑話『喚ばれし者』	147
閑話『???転生』	150
西洋編	
第一話『西洋の地』	155
第二話『吸血鬼と勇者達とオマケ』	158
第三話『吸血鬼と勇者達とオマケ その二』	161
幕間	165
幕門②	167

この作品を読むにあたって

皆さんおはこんにちは。

作者です。

タイトルどおり、この作品を読むにあたっての注意事項です。どれか一つでも当てはまったらブラウザバックしてください。ネタバレかも知れませんが、ご注意ください。

「なんでもいいよ」という方は無視してください。

一

この作品は東方Projectという作品の世界観を使った別作品です。

原作キャラは一部しか登場しませんし、原作設定無視したりしてま

二

原作キャラ死にます。

誰が、とは言いませんが。

三

作者はゴミです

生きる価値もない人の形した屑野郎です。

四

オリキャラヒーバーです。

これでもかってでます。

五

紫りんが雑魚になります。

あと結香とかも。

六

オリ主です。

オリ主最強（笑）です。

七

駄作 駄文です。

とても人様に見せられるような物ではないです。

- 八 戦闘描写下手です。
- 九 二次設定使います。
原作設定？知らない子ですね。
- 十 コラボしてたりします。
本編には関係ないのでご安心を。
- 十一 フラグとか伏線下手です。
あからさまなフラグ、伏線です。
- 十二 ネタとかあります。
アニメネタとか色々。
- 十三 小説家になろう様にも出しています。
あんまり更新してないのでハーメルン様のがいいです。
- 十四 作者が中二病患者です。
キャラ名技名など中二です。
- 十五 短いです。
一話一話大体千文字程度です。
- 十六 いや、二千とか書きたいんですことなぜか千字できりがよくなつて
しまい……（言い訳）
- 十七 作者のリアル忙しくなったりするとなにも言わず更新しなくなつ
たりします。
失踪はしないので御安心を。
- 作者ツイッターやっています。

十八

インフレします。

どごぞのドラゴンなボール集めるアニメ程ではないですが。

十九

主人公不老です。

不死じゃないです。

二十

誤字 脱字のオンパレードです。

いや。中々減らないんですよ。

二十一

作者豆腐メンタルです。

ちよと触っただけで砕け散ります。

二十二

もしかしたら感想や活動報告コメに居るかもしれません。

見つけたら「とつとと小説書けやゴラア！」と言ってやってください。
い。

隣の家の田中君が喜びます。

二十三

作者は淫夢厨……ではありませんが淫夢ネタを番外編等でぶちこ
んだりします。

二十四

作者は変態です。

二十五

更新遅いです。

不定期更新です。

できれば二日に一回は更新したかったりします。

二十六

作者はネット初心者です

です。至らない点ばかりです。

二十七

作者失踪したりします

二八

この作品は作者の自己満足作品です。
俗に言うオ○ニー小説です。

二十九

二週間に一話更新します

次回は5/23です

……………と、こんなもんでしょうか。

他にも色々あるかもしれませんが。

気付いたりしたら更新していきます。

……………意外と多いな、注意事項

それでは、とう！

番外編 『東方博麗伝』とのコラボ！
前編 『少年』

「あくねみい」

夜、俺は焚き火の前でだらくとしていた。

なぜかとうとさつき釣った魚を焼いているのである。

しかし、なかなか釣れなかったため、こうして夜に焼くはめになったのである。

解せぬ

しかし、それはおいておこう。

「おっ焼けてきたな」

なに？寄生虫とかそういうのは？だつて？

全部霊力ぶちこんで殺しましたがなにか？

正確には霊術だが。

そんなことを考えていると、目の前に目がいっぱいある、気持ち悪いものが現れた。

ていうかこれ、スキマじゃん、何であるの？

まだ紫は生まれてないと思うが。

「よこしよん」

スキマから少年が現れた。

年は… 15か16だろうか？だいたいそれくらいっぽい。

腰のところに陰陽玉だったかがデザインされた帯を巻いた赤い装束に、白い袴を身に纏っている。

白い袖は服と切り離れており、赤い細身のベルトでずり落ちない様に留めている。

髪はかなり長い、腰の少し上くらいまでである。

首辺りのところの髪を赤い布切れでリボンの様に纏めている。

そしてイケメンである。

イケメンである（大事なこと）re

そしてまたスキマからBB A… じゃなかった、八雲 紫が現れ

た。

はて、これはめんどろこの予感。

まあ、楽しそうだったら嫌でも絡むか。

「初めまして、氷霧 零さん」

「あ？」

何でこのガキ、俺のこと… いや、紫から聞いたのか。

「貴方に話があるの」

そう、BBAは言ってきた。



「まずは自己紹介から、俺は博麗・八雲 笑夢 ですよ

博麗の巫女、博麗 霊夢の弟で、妖怪の賢者、八雲 紫の養子です、よろしくお願いします」

「は？」

え？ 待つて？ いやマジわからん。

霊夢の弟はギリギリいい、だが紫の養子ってなんだ養子って。

マジ無理わかんない。

仮に考えるならオリキャラか転生者か、はたまたIF世界パワレルワールドの住人か…

「貴方が考えていることは正しいと思うわよ、それで、自己紹介は？」
心読むなし。

そして俺もするのかよ。

てつきり知ってるもんだとおもってたが。

「えー俺は氷霧 零ひょうきりれい、旅する一般人だ、夜露死苦」

「は、はあ」

あ、困惑してる。

ということとは転生者ではないかな？

まだわからんが。

そんなどうでもいいことを考えていると、紫が語り出した。

「零、貴方に訪ねたのは笑夢ちゃんの修行に付き合っしてほしいのよ」
あらやだ面倒この予感。

「ダンジョンを攻略して欲しいのよ」

「詳しく」

「ええ、ある雪山にある宝玉をとって来てほしいのよ」

「その助っ人が俺、ということか」

「あら、察しがいいのね」

「は、数億年も生きてれば察しもよくなるわ」

「決まりね、じゃあ、ダンジョン『雪山』攻略開始！」

——こうして、俺は雪山攻略をすることになったのだった。

中編『雪山』

「あらよつと」

「とと」

「ーあのあと雪山を攻略くすることになった

俺達は、紫のスキマを使い、雪山まで来ていた。

「ふう… 水と風を操って…」

一緒に来た笑夢がなんかぶつぶついつてる。

「……よし」

お？なんか笑夢の回りに結界のようなものができたな。

「なにそれ？」

知らないことは聞く、これ常識。

「あ、俺の能力を使いました」

「へえ」

なにそれ便利。

欲しいんですけど。

「よかったら氷霧さんにも張りましようか？」

「別に大丈夫だからいいよー」

雪山ということだけあって、少し肌寒いが、

別に問題はない。

予想だが、俺の能力『氷を司り 氷らせる程度の能力』のおかげだ
と思う。

「ほいじゃ、行きますか」

「はい」

霊力を使い、飛ぶ。

なにもバカ正直に登山する必要はない。

空飛べるから普通に飛んでいけばいい話だ。

そして今さらだが、雪山攻略で、俺達は縛りを設けられている。

それは『スペルカードルール』の一部適用だ。

スペルカードルール。

それは原作にあったルールで、たしか

美しさを競う遊びだった筈だ。

だが、一部と言った様に、全てじゃない。

スペルカードを宣言し、相手を倒すというルールになっている。が、スペカ以外使用不可だ。

氷符『アイス・ショット』で倒すのはOK

だが宣言なしに霊術、能力で倒すのは不可ということだ。

実に面倒だ。

だが、おもしろい。

転生する前は縛りプレイとかもよくやってたからな。

いや、流石に初期装備、一レベ縛りでラスボス倒したりしてないが。

「グギアアアー！」

つと、なにやらドラゴンが現れた。

この雪山に生息する雪竜スノー・ドラゴンである。

ゲームによくある見た目の、蜥蜴に翼が生えた姿をしている。

サイズは馬の二倍くらいだろうか？いや、それより大きいかもしれない。

とりあえず。

「俺にらせてください、喰符くうふ『獸牙双炎』じゆうがそうえん」

俺が殺ろうとしたら、笑夢に越されたでござる。

炎を纏った御札を二枚投げたと思ったら

炎が狼の顔になり、噛みついたら、爆発した。

なにあれ凄い。

今度真似よう。

なお、死体はスキマにしまわれたとき。

「グギアアアアア!!」

「え？」

「は？」

ここの竜は仲間意識が強いのだろうか？

一匹殺したらメチャクチャ湧いてきた。

距離はまだあるから問題はないが。

数は約・・・百匹程だろうか？

それより多いかもしれない。
とりま。

「お前ら邪魔だから死ね、氷符アイスキング・バビロン『氷の王の財宝』」

何時しか使ったスぺカ発動。

氷の剣や槍、ハンマー、斧、パルチザン e t c e t c . . .

それらを一気に竜どもにぶつける。

風を切り裂くような音とともに竜どもが死んでいく。

が、全て殺せる訳もなく、数匹程こっちにくる。

「刻符こくふ『碧天空刃へきてんくうは』」

笑夢が風をまとわせた御札を4枚展開する。

竜を左右から2枚の御札で切り裂き、続けざまに上下から切り裂いていく。

切れ味凄いな、おい。

「行きましようか、氷霧さん」

「おう」



『下等生物人間風情が. . . 我になんのようだ?』

なにこいつウザッ

無事登頂までこれたのはいいが、登頂にいる竜がうざい。

明らかにこっち見下してるし。

でかい、これでもかかってくらいデカイ。

ファンタジーの竜の様に首が長く、爬虫類特有の鱗をしている。

そして翼が生えている。

サイズは. . . 飛行機ぐらいあるんじゃないかな?

だって見上げれるくらいあるし。

「お前殺しに来た」

「えっ?!」

『人間風情が. . . 消し炭にしてやる!!』

「ハッ！殺れるもんなら殺ってみろ！！」

N e x t p h a n t a s m ……。

後編 『竜王』

「そんな訳で、笑夢、あとは任せた」
「えっ?!」



『ふん… 煽っておきながら自分で戦うこともしないとは…やはり下等生物だな』

ガハハハ、と竜王が嗤う。

それに対し、笑夢は――

(いやどうしろとオオオ?!)

――混乱していた。

それもそのはず。

「殺れるもんならやってみろ」と、啖呵を切ったにも関わらず、「笑夢、任せた」

と飛び去ったのだ。

笑夢は泣いていい。

『さて、人間よ、死ぬ覚悟はできたか?』

(出来てるわけないでしょ!!てか氷霧さんは?!)

どこに逝ったあいつ、と探すと人一人隠しても余りある岩からサムズアップしていた。

後で殴る。

そう決心した笑夢であった。

そんなことを考えている間に、竜王は霊力でも妖力でもないカー――
――笑夢は知らないが魔力を――口にため始める。

『消えるがいい人間下等生物魔符「魔砲」』

魔力による砲撃というか、レーザーが発射される。

それは、魔理沙の放つマスタースパークに、にていた。

「結界『金剛障壁』」

とつさにスペルを発動する。

笑夢の周囲に御札が展開し、結界ができる。
そのままぶつかり、魔力のレーザーが消えると同時に、結界も消えた。

怯む笑夢。

『ふむ、ならばこれはどうだ？』

右手―右足かわからん―で殴りかかってくる竜王。
後ろに飛び、避ける。

「降符『彗星時雨』」

地の力―笑夢の能力―を宿した針を3本ずつ、計12本上空に放つ。

針は時間差で3本ずつ竜王の頭上に落ちていく。

その様子は、さながら彗星のようである。

しかし、傷を与えただけに終わった。

全弾命中。

それでも、鱗を一枚二枚、破壊しただけに終わった。

『ほう……ならば竜符「竜王の咆哮」』

放射状に魔力の弾幕を展開する竜王。

飛び回り、回避する笑夢。

現状、笑夢には火力が足りない。

下手なスペルでも放とうものなら、返り討ちに会いそうだ。

時間いっぱいまで、避けることができた。

が、被弾はしてなくても、数発程カスってしまい、少くないダメージを負ってしまった。

「そおいー！」

『グボアー！』

竜王の首が、落ちた。

デカイ―五十メートルはあるであろう、巨大な剣により。

「え？」

笑夢は、混乱した。

なぜなら、零が、竜王を、殺したのだから―

◆
作戦成功!

いやー成功するかわからなかったが、成功してよかった、うん。

因みに作戦名は、「笑夢と竜王が戦っている間に、ぶつ殺しちやおう大作戦☆」である。

そのまま。

「えーいや…流石にこれは…」

「なあに、引いてルンだこのやろう、とつとと回収するでえ」

と、俺は近くに落ちていた白い玉を拾う。

これで……

「ダンジョンクリア!」

◆

「流石にそれはないわね」

「そうですね」

俺の作戦は不評である。

合理的だと思っただんだがなあ……………

「彼の台詞がようやくわかったわ……………」

なんかいつてるしこいつら。

「で、修行おれで終わりか?」

「え、ああ終わりです」

「流石にあれは……………」

まだ言うかこいつら。

紫がスキマを開く。

「それでは、またいつか会いましょう、氷霧さん」

「おう!またな!!」

すきまに入り、笑夢は帰っていった。

まったく、実に楽しかったぜ、笑夢。

さて、じゃあ。

「俺も行きますかねえ!!」
「ーまだ冒険は、終わらない。」

番外編 『東方波動郷』とのコラボ！
前編『遭遇』

「ああ〜ねみい」

夜、俺は焚き火の前でそんなことを呟いていた。

現在、俺は長野県諏訪市（仮）に向かって旅をしている。

まあ、空から見てこっちな。

と思っただ方に歩いてる為、間違ってるかも知れないが。

「……あああ

？なにか聞こえたような……

「……あああああ

また聞こえた、幻聴かな？

「……あああああああ

いやこれ幻聴じゃねえ?! 誰かの悲鳴だ!?

悲鳴が聞こえる方へ走り出す。

時々でてくる雑魚妖怪を倒しながら走っていく。

約十分程走っただろうか？

走った先に見たものは。

「なんだこれ……」

「……空間の裂け目のような、裂け目のような、よくわからないものだった。」

「……いやまってホント、なにこれ。」

空間が裂けてるっていうか……正しくそれなんだけど。

赤く、そして黒い、禍々し色の裂け目だ。

なんなのこれ？ 誰かの呪いですかコノヤロー！

「……あああああああああ!!

「ぐぼあ?!」

突如裂け目から少年が出てきて俺の腹に頭からダイレクトアタツ

クシヤがった!

「てメえ! 覚悟できてんだろうな?!」

そう叫びながら、冷製に氷の剣を作り、相手を見る。

……が、五分程経つても、動かなく、気になり、少年の近くによる。すると。

寝ていた。

「寝てるんかい!!!」

思わず、つつこんでしまった。

「はあ……」

あれから約二十分後。

気絶? していた少年を連れ、キャンプ場まで戻ってきた。

「どつこいしよ」

と、運んで来た少年を地面におろす。

もう一度、少年を見る。

身長は170程に見える。

そして日本人特有の黒目黒髪。

そしてタキシード。

…… 訳がわからないよ。

なんなん? こいつなんなん?

転生者? だとしたらなぜあんな場所から?

月人? ならなぜタキシードを?

…… まじで解らないんだけど、こいつ。

「…… うっ…… ここは……」

「あ、起きた」

じゃあたつぷり聞きましたようか。

まず

「あんた誰?」

「えっ? 俺は竜河りゅうかわ 蓮れんつていいいます、貴方は?」

「俺か？俺は氷霧ひようぎり 零れいだ、で、聞くが

「……てメえなにもんだ？」

「そういい、俺は少年の首筋に、剣を向けるのだった。」

「はっ話合いましたよう！」

「で、まず自己紹介から」

「剣を向けた時、少年は凄く驚いていた…… というよりは恐怖していたので。」

「まずは落ち着き、自己紹介から始めることにした。」

「まあ不審な動きしたら殺すが。」

「えっと…… まずは俺から、さつき言ったとおり竜河りゅうかわ 蓮れんっていいま

「す、歳は16、幻想入りして、今は紅魔館の執事をしています」

「は？」

「え？待って、なに言ってるのこいつ？」

「まだ紅魔館ないよね？というか幻想卿もないよね？」

「えーじゃあ次は俺か

「俺は氷霧ひようぎり 零れいだ、歳は…… わからん、が、お前よりは歳上だ、以

上」

「氷霧さん、ですね、失礼ですがここは何処でしょうか？見たことにい場所なので……」

「あー…… 俺の予想だが…… ここは異世界だと思ってる？」

「え？」

「俺の言葉に、蓮は……」

「異世界、ですか……」

…… 余り驚かなかった

「えー普通異世界とか言われたら、驚くもんじゃね？」

「いえ、既に魔法とか霊力とか、色々ファンタジー的な現象にあっているんで……」

「…… あっそう」

なんだそれ

「詳しい話は私がするわ!!」

空中から胡散臭いBBAが現れた

中編『蓮君の修行』

「それについては私が説明するわ!」

突如空中からBBAが現れた。

な、なにお言つて(re

……て、こいつ八雲 紫じゃねえか、なぜここに?

「ゆ、紫さん?!なぜここに?!」

「あ?蓮、お前の知り合いか?」

「は、はい、一応……」

「一応なのか……」

「と、とりあえず説明するわね」

紫は、話始めた。

「まず、この世界は幻想卿ができる前の世界…… まあ過去の世界と
思つて頂戴

正確にはIF世界パラレルワールドなのだけど

それで、蓮貴方がここに居る理由は“修行”の為よ」

「修行?」

「ええ、貴方にはもつと強くなってほしいのよ、

貴方だつて、強くなりたいでしょ?」

「……はい……」

ふーん、なら。

「俺には関係ないな、そんな訳でさい」

「いえ、貴方にも関係あるわ」

正直、めんどくさくなりそうなので離れようと思つたら、紫に引き
留められた。

「はあ?何でだ?」

イラついた声で返す。

俺の言葉に、紫は。

「蓮、貴方の修行の内容は――」

――氷霧 零、貴方を倒すことよ」

―― s i d e

蓮――

「氷霧 零を倒すことよ」

(……………えっ)

八雲 紫の言葉に竜河りゅうかわ 蓮れんは驚いた。

というよりは、動揺したと言わべきか。

(え？待って、倒すの？この人？)

「あの、紫さん、俺、この人倒すんですか？」

「ええ、と言つても、弾幕ごっこでだけどね」

弾幕ごっこ

それは「人間でも神様と同等の強さを発揮できる」決闘である。

まあ実際にやれば死者多数だが。

「成る程…………」

(それなら、勝てるかも知れない)

「おいこらちよと待て」

氷霧の声に、二人が振り返る

「何で俺が戦うことになってんの？許可だして無いのになんでやる流れなんですかコンチクショ―」

「あら？貴方に拒否権なんてある訳無いじゃない

抵抗するなら無理矢理でもやらせるわよ」

――

「はあ…………」

「じゃあ氷霧さん、いきますよー」

蓮の言葉に、やる気が無くなつていく

何故か俺はあのあと、蓮と弾幕ごっこをすることになった。

まあ面倒なので適当にやるが

「じゃあいきますよ………… 水符『水竜の咆哮』」

蓮が言うと同時に、水で出来た竜が現れた。

が

「氷れ」

俺の言葉で、竜は氷った。

「なっ?!」

「ホイ」

蓮が凄く驚いているが、キニシナーイ

そして更に、氷らせた竜を操り、蓮に向けて、放つ。

「火符」クレムリッソン・レイ紅蓮の一閃」

そして蓮は、片手に炎を生み出し、竜に向けて放った。

そしてそのまま直撃。

竜は溶けて蒸発した。

「面倒な、氷符『アイス・ショット』」

さっき作ったばつかのスペカを発動。

このスペカは氷の剣や槍、礫等を作り、相手に向けて放つというものの。

何気にホーミング機能付きという優れもの。

「水符」ウォーター・ザ・エッジ『水流の刃』」

空を飛びながら避けていた蓮だが水で出来た巨大な斬撃を放ち、氷の弾幕を全て砕いた。

「だが、まだ甘い」

「?!」

蓮が砕き、小さな粒となった剣等が、そのまま蓮に向かって飛んでいく。

「なっ?!」

しかし、蓮は対処出来なかったのか、そのまま喰らい、ピチューンという音と共に墜落した。

やったぜ

ーーーーこうして蓮の修行が始まったのだった

後編『終わりは始まり』

「オラア！」

「ぐはっ！」ピチューン

俺が飛ばした槍により、蓮は落ちた。

「……………あれから一週間。

無理矢理蓮の修行に付き合わされたが、今では受けて良かったんじゃないかとすら思っている。

理由は… わからんが。

「そろそろ終わりにしましょうか」

そんなことを考えていると、紫が変なことを言い出した。

「終わり？ まだまだ改善の余地ありだと思おうが？」

「えっ」

蓮が驚いてるが、キニシナイ。

「いえ、流石にそろそろ帰らないと、心配してるんじゃないかなって」

「あ…」

紫の言葉に、蓮が納得したような声で返す。

「なに？ お前彼女でも居るんですかコノヤロー」

「なっイエイエイエ!! いませんいません!!」

「いないのか、チツ」

「… あなた今、露骨に舌打ちしたわね」

知らんな。

「……………そして最後の戦いが始まった。

「よしバッチコイ」

「はい！ お願いしますー！」

戦闘のお陰で平地とかした場所で、俺と蓮は充分な距離をとり、構えていた。

「火符『クリムゾン・レイ紅蓮の一閃』」

蓮のスペカ宣言と同時に、俺に向かってデカイ炎が向かってくる。

「氷符『アイスクリエイト・ビククアイスソード氷創造・巨大氷剣』」

俺のスペカ宣言と同時に、約五十メートル程の、デカイ剣を生み出す。

そしてその剣を操り、炎を切る。

そして切られた炎は氷った。

このスペカは氷の剣を生成し、そして切った物を氷らせるというものの。

氷らせれない物はない。

そしてそのまま氷らせた炎を操作、蓮にぶつける。

が、着弾ギリギリで蓮は氷の炎を破壊。

「火波動『ルビール・エクスパロージョン砕けし紅玉の大爆発』」

「あ？」

蓮の周囲に小さい波動？だったかで出来た物を六個程生成。

内2つが俺に向かってくる。

俺はそのまま氷の剣で切ろうとするが。

爆発

氷の剣は砕け散った。

「チツ氷符『アイスキング・バヒロン氷王の財宝』」

氷の剣や槍、ハンマーに楯 e t c e t c

それらを俺の背後に生成。

そして一斉に発射。

蓮は残りの波動四個をこちらに向けて発射。

「火符『フルーミング・フレア大華炎の開花』」

蓮の前方に大きい花のツボミが現れる。

俺は即座に氷の武具を向けようとするが、蓮の波動により破壊される。

そしてツボミが開花し。

そこからレーザーが発射される。

「氷符『アイスクリエイト・ウォール氷創造・壁』」

氷の壁を作り、防ごうとするが、そのまま氷の壁は溶かされ――

「最後のあれは予想外でした」

「H A H A H A H A まだまだ甘いな、蓮」

あのあと、そのままレーザーでやられるかと思ったが

氷符『アイシツクル・ワールド氷結されし世界』を発動。

そのまま蓮を氷らせ、俺の勝ちになった。

やったぜ

「それじゃ、開くわよ」

すると紫が俺が蓮と出会う切っ掛けになった

空間の裂け目（仮）を開いた。

「それじゃまたいつか会いましょう！ 師匠!!」

「フアっ?!」

最後にとんでもないことを言い、蓮は空間の裂け目に入っていった。

「…… やられたなあ……」

「ふふ、貴方もまだまだね」

「うっせうっせ」

――俺達の戦いはこれからだ！

第一章超古代都市編 よくあるプロローグ

俺は学校に行く途中友人と会話していた。

そう、会話をしていたのだ。

なにか大きな音がしたと思っただら真つ白い場所にいるのだ。

「訳がわからないよ」

「そうじゃろうな」

「!？」

後ろから声が聞こえた。

驚き後ろを見るとー

「……ダン○ルドア先生？」

「違うぞ」

なんだ、違うのか、ちっ

「聞こえとるぞ」

「だにい!!」

「まさか……心を読んだのか!」

「いや、だだお主が口に出してるんじゃないよ」

そうなのか、安心、で。

「あんた誰」

「ワシは神じゃ」

「ああ成る程紙ね」

「違うぞ」

「じゃあ髪?」

「じゃあつてなんだよ、あとそれでもないぞ」

「それじゃあなんだよ」

「神だよ、神、GODだよ」

「……じいさんその年で中二病か?」

「中二病じゃないぞ」

「じゃ証拠見せろよ」

「よかろう」

そう言うといじいさんは皆さん知っているであろうかまえをした。

「え？」

「かーめー〇ーめー」

「おいバカやめろ!!」

「はー!!!」

どごおおおおん

「…わーお」

!!!!!!!

被害はなかった。

「で、これで信じるか？」

「信じないと話が進まないだろうから信じるよ」

「よかろう」

「で、何で俺ここにいるの？」

「理由は死んだからじゃ」

「え？、俺死んだの？」

「そうだよ(怒)」

「わかりました」

「そんな訳で転生するぞ」

「マジかよ」

「転生特典どうする？」

「考えるから待ってください」

後

一 時 間

「うーん(´・`・´)」

「決まったか？」

「ランダムでいいや」

「それでいいのか」

「それじゃあ…ほいつとな!!」

「なんだそのかけ声?!」

「しかしなにも起こらなかった!!」

「なぜ?」

「それはこれから逝く世界に入ると能力がてにはいるものじゃ」

「へえ」

「行く世界はどうする?」

「東方で」

「はえなおい」

「転生するなら東方と決めてたからさ」

「そうか」

「ところでじいさん」

「なんじゃ?」

「なんの神?」

「何でそんなことを?」

「いや、二次創作とかだと天照大神だったりするから」

「まあよかろう、ワシは”テンプレの神”じゃ」

「テンプレの神?」

「その名のとうりテンプレを起こす神じゃ」

「変な神様」

「うっさい」

「それじゃやるぞ」

「はいはい」

「そんな訳で転生します」

「qzclghlgrvqrnrq!!」

「なにその呪文!?!」

「パカッ」

「ゑ?」

「あら不思議地面がなくなっています。」

「ぎやああああ!!」



「逝ったか……」

「しかしなにか間違えたような……」

「あ、わかった」

「さつきかけたやつ性格とか全て変わるやつだった」

よくある展開

「知らない天井だ」

テンプレ乙。

そんな声が聞こえそうだから…

「残念！天井はなかった！」

なんと森に居たのである。

なお、まわり全て木。

「どうすっつかない」

森とかなんだよ、せめて町の中とかにしるよ。

しかし神に文句を言っても意味ない、とりあえず。

「歩くか…」

―――――――――― 3 0 分

後――――――――――

結果

「なんの成果も!!得られませんでした!!」

ちくせう。

歩いてたのになにもないってなんだよ。

「ぐおおおおおおお!!!」

「!?!」

なにかの 雄叫び が 聞こえた!!

自分は どうする?

逃げる 戦う そんなことより、おうどん食べたい。

←

逃げる 戦う そんなことより、おうどん食べたい。

「逃げるんだよオ！」

自分は、逃げた!

残念!、なんとまわりにモンスター(でっかい狼)が現れた!

どうする?!

「ふせてー!」

と、ふざけたことを考えてると急に声が聞こえ言葉どうり伏せた。

どす！どす！

とあら不思議狼達が倒れていくではないですか。

「大丈夫？」

声をかけてきたのは変な服をきた女性だった。

「大丈夫だ、問題ない」

「そ、そう」

あ、なんか困惑した顔になってる。

「何であなた”妖怪の森”にいるの？」

「目が覚めたらここにいました」

「そう」

「え？」

明らかに嘘なことを信じただと？！

「何で信じたって顔ね…」

それやそうでしょ。

「最近目が覚めたら森にいた、空から落ちてきた人とか、たくさんいるのよ」

ふむ… 転生者か？

「それと私の名前は 八意 永琳よ」

マジ カヨ

まさかの原作キャラ登場。

しかし”妖怪の森”何てあったか？

もしかしたら原作前かもしれないな…

「で、あなたの名前は？」

むむ… 名前か…

「俺の名は 氷霧 零 だ」
ひょうぎり れい

「やっぱり聞いたことない名前ね…」

そうでしょうな。

「とりあえず”都市”に行くわよ」

「あっはい」

しかし転生者がいるのか… 大丈夫かな…

え？、何でそんな心配するかって？

転生者はみんなチート持っててしかも俺TUEEEEEEEEE
EEやってるから嫌なんですよね…

おまけに俺TUEEEEEEEEEEEは他の転生者を嫌って
いたりするんですよ…

「なに考えてるの？とつとつと行くわよ」

「あっはい」

—————

「ここが都市よ」

「なあにこれえ」

未来都市だった。

高層ビルが多くあり一個一個が東京タワーぐらいある。

あと、未来アニメにありそうな白い筒もある

しかもドラ○もんとかいるし…

「ツクヨミ様に会いに行くわよ」

「ツクヨミ様？」

「この都市のトップよ」

「ついでに神でもあるわ」

「なにそれ怖い」

「安心して、以外と優しいから」

そして俺はツクヨミに会いに逝ったのだった。

Next phantasm…。

よくある展開 (その2)

前回のあらすじ。

ツクヨミっていう神に会いに逝くお。

永琳は優しいって言ってたけどやっぱり怖いお。

「なにやってるの?」

「しらんな」

――
俺は執務室のような場所に居る。

「あなたが氷霧ですね、私はツクヨミ、この都市のトップです」

「あっはい」

やあみんな氷霧だよ、今ツクヨミ様と会話してます。

「あなたには“軍”に入ってもらいます」

「はい?」

なんでや!

「あなたは能力を持っています、ですので軍に入ってもらおうかな、と」

「…軍に入らなかつたら?」

「そうですね…永琳の助手にでもなつて」

「喜んでやらせてもらいます!!」

永琳の助手だけは嫌だ!、絶対危ないクスリとか飲ませるに決まってる!

「そ、そうですね、では試験を一週間後に受けてもらいます」

「はい、分かりました」

あ、そういえば。

「俺の住む場所ってありますか?」

「ありません、まあ軍の寮で暮らしてください、あと、一週間は永琳の家で暮らしてください」

「それでいいですね永琳、氷霧さん」

「わかりました」
そんなわけで永琳との暮らしが始まるのだったー

永琳と氷霧がさったあと。

ツクヨミと会話していた場所で

ボン！

なにもない場所から誰かが現れた。

「よ、ツクヨミ」

「… あなたですか、なにか用事でもあるんですか？」

「いやー用事って訳じゃないけど… あいつ、どんなやつだった？」

「あなた達に近いものを感じました、恐らくあなた達の種類でしょう」

「おーよくわかったねー」

「で、それだけではないでしょう、いったいなんのようですか？」

「あ、バレた」

けらけらとその”彼”は笑う、その声はまるで”待っていた”かの
ように…

「俺が”言ってた”こと、もうすぐ始まるよーん
！」

「…では、彼が”それ”の黒幕ですか？」

「いや、違うよ☆」

「”あれ”は”俺たち”が居なくても起こることだ、俺らが来たとしても、居なかったとしても同じことさ☆」

「…そうですか、ではいい加減教えてください、貴方達は何者か」

「んーそれはまだ言わないよ♪」

「…また、それですか」

「大丈夫だって、そんな心配しはくてもさ☆」

「それに、俺が言わなくてももうすぐ分かるだろうしね♪」

「なっ…」

「じゃ、俺は帰るよ、そろそろ腹へってきたしねー」

「バイバイ★」

ボン！

その音とともに彼は消えた。

まるで最初から居なかったように…

「まったく、ホントあなた方は何がしたいんですかね」

あきれたようにツクヨミが呟く

「…軍に警戒するように言っておきましょうか」

なにかが始まるー

よくある永琳の家

「ここが私の家よ」

「（。 ㇿ。）ポカーン」

「…………… どうも皆さんおはこんばんにちは、氷霧です。」

ツクヨミさん（さんでいいのか？）の会話を終えた俺は今、永琳の家の前にいた。

が、すごく…………… 大きいです……………

うん、家でかい。

どれくらいでかいかというドラ○もんにてでくるス○夫君の家の十倍ぐらいでかい

そして中に入るとー

「お帰りなさいませ八意様!!」

執事とメイドがいた（約十人）

「ただいま」

「八意様、そちらの方は？」

「彼は客よ、一週間程泊めることになったから、よろしく」

「…………… わかりました」

と、執事さんは、消えた。

「フア?!」

何がおこった?!

「なにやってるの?、とつとと行くはよ」

「えっあ…………… ハイ」

—————

「ここが氷霧様のお部屋になります」

「わかりました」

あのあと永琳と別れた俺は、メイドさんに案内されていた。

「それでは、私は戻るの、何かありましたらお呼びください」

ガチャン

部屋は、なんかホテルのスイートルームのような部屋である。

すごい高そう（小並感）

「疲れたー」

ホントに疲れたな

死んで、転生して、神様と会話して……

色々あった一日だった

てか、ツクヨミさん、って日本神話に居なかったけ？

「そのとおり！」

「!?」

なにか聞こえた

が、幻聴だろ、多分

「いや幻聴じゃないから！脳に直接語りかけているの！」
なにそれ怖い。

「ホレ、あつたじやないか某掲示板で……」

おいバカやめろ。

「まあおふざけはここまでにして、まじめな話をしようじやないか」
えーめんどい。

「そんなこと言うな！ホントにマジメな話だから！」

わかったー

ポリポリ↑ポ○チ食べてる。

「ポテ○食うなよ！、まったく……」

で、なんの話？

「おまえさんのことと、他の転生者のことじゃ」
えっ他に転生者いるの？

「いるぞ、いっぱい」

それってヤバくない？

「そこんところは大丈夫」

ふーん

「あと、転生者を知っているものも何人かいるぞ」
そーなのかー

「ルーミアのマネするなよ……」

いいじゃんべつに

「ハイハイ、でおまえさんのことだが……」

なにかあんの？

「ちよとミスっちゃた」

え？

「まあ安心せい、能力が一個か百個のちがいだから」(他にもあるけど……)

差すごいなおい。

「あとは、特にないの」

ないのか。

「あ、最初にいったツクヨミのことだが」

なに、またミスったの？

「ミスってない！」

ないのか、ちっ

「舌打ちすんな！」

で、何でいるの？

「ああそれはこの世界には、原作同様、日本神話の神々がいる」
神々ってことは、天照大神も？

「いるぞ」

いるのか…

「これだけだから、じゃあねー」

すると声は聞こえなくなった。

こんこん「失礼します」

「はい？」

「八意様が、これを」

と、差し出されたのは、でかい参考書数本だった。

「それでは、」

「ん？」

よくみ見るとメモが張ってある

「ふむふむ」

メモには、こう書いてあった。

これ全部覚えてね♥

「マジかよ...」

俺は一人そう言うのだった。

よくある試験

「うし、殺るか!」

「ーヤらないか。」

「?!」

な、なにか聞こえた…

が、無視しよう、うん。

あ、皆さんおはこんばんにちは、氷霧です、今軍に入るための試験会場前にいます。

ちなみに試験会場は東京ドームの十倍ぐらいある。

あと、永琳の家で暮らして一週間たったぜ。

一週間の間薬飲まされたり体解剖されそうになったり…色々あった。

が、それも終わり、これが終われば解放されるんだ!

………フラグ建築したようなきが…気のせいか。

――――
一時間後

「ふっ…… 燃え尽きたぜ……」

まさか… 覚えてきたものをどわすれするとは……

やつちやたぜ!

すると見たことない人がきた

見た目身長165センチぐらいで黒目、黒い髪をしている

あと、赤い服を着ている

「よっ!、なに燃え尽きてんだ?」

「あなたは…?」

「俺は鈴木カズキっていう、あんたは?」

「俺は氷霧 零だよ、よろしく」

「こつちこそよろしくな！」

がしー、

ホモ 同士の 友情が 生まれた！

(変なナレーションが聞こえた希ガス)

「で、何であんな燃え尽きてたんだ？」

「どわすれして、テスト内容が全くわからなかったんだよ…」

「それ問題なくね？」

「え？」

「いや、軍は妖怪と戦えるかが問題視されるから

当たり前なことさえわかっていれば問題ないぞ」

「なん…だと…」

ピン ポーン バーン ボン！

<今から第二試験を十分後に始めます、試験を受ける方は第三運動場に集まってください>

「お、ちようど始まるな、一緒に行こうぜ！」

「あ、ああ」

ピンポンパンポーンじゃないのか…

そう思いながら鈴木と一緒に第三運動場まで行ったのだった…

――
鈴木と俺が行くと既に集まっていて、会話していた。

「ちよと金よこせ」「そんなことよりヤ★ら☆な★い☆か★」「ファ?!」

「ふつ俺は漆黒の翼、世界を滅ぼす者…」「ちよとお兄さん、イイコト
しなあい」

…… 変な人しかいねえ。

大丈夫か、軍？

「皆さんお静かに」

すると全員黙った。

「えー今回の試験は、特別にわたつき綿月 らんが嵐我様がしてくれるそうだ、みんな
頑張るように！」

ざわ…ざわ…

みんな驚いてるな、てか、鈴木も驚いてるし。
そんな訳で聞いてみよう。

「なに、その人そんなすごいのか？」

「えっ！、知らないのか?!」

なんか驚いてる。

「嵐我さんは、大妖怪を一人で倒して、生還した人だよ！」

「まじすか」

と、言ってみたが、そんなすごいかわからん。

だって大妖怪どんだけ強いかわらんし。

「綿月さんよろしくお願いします！」

「私が紹介された綿月 嵐我だ！、みんな試験頑張るように！」

綿月さんの見た目は… うんゴリラ。

顔はいいんだけど腕が丸太みたいに太くて（ついでに足も）そして

約二メートル程ある。

うんデカイ。

「試験内容は綿月様との一騎討ちです！皆さんがんばってください
！」

よくある試験（後編）

「えー次番号114514番、氷霧 零 さんです準備してください」
なんだ、その番号

あ、どうも皆さんおはこんばんにちは、氷霧です。
今から試験だけと…

正直に言おう、めんどくさい。

てかどう戦えばいいの？俺戦闘力五だよ？

「それについては問題ない！」

あ、神様、なんのよう？

「お主の能力を教えてやろうと思ってな」
俺の能力なに？

「お主の能力は＜氷を操る程度の能力＞ じゃ！」
なあにそれえ。

「それじゃあのを」
「それでは114154番、氷霧 零 さん始めるのでこっちに来て
ください」

「わかりましたー」

じゃあ頑張りますか。

「武器はどうしますか？」

光剣 片手剣 銃 と色々ありますが

「剣で」

「さあ、くるがいいー！」

何でそんな燃えてるの？戦闘凶なの？

怖いよ綿月さん。

「じゃ、逝きますよ（誤字にあらざ）」

「そいやー！」

手に持っていた剣を投げた。

が

「ほい」

かん！

という音とともに弾かれた。

「あらよつと」

瞬間剣が綿月さんに刺さった。

「な……」

種は簡単、空中に氷の剣を作り、当てただけだ。

できてよかった。

「ほっー」

「あっ」

気づいたら綿月さんが目の前にいた。

「はっー」

どごおおおおおおん

そして意識が消えた。!!!!!!!

その後、ツクヨミの部屋で、

ツクヨミと綿月が話をしていた。

「彼はどうでしたか？」

「……強いですね、私が傷をつけられたのは何年ぶりでしょうか」

「やはり……」

ツクヨミは難しい顔をしている。

「……（これで確定ですね）」

「どうしました？」

「……いえ、なんでもありません」

「そうですか」

「綿月さんは彼の監視を続けてください、なにかあったらすぐに連絡するようには」

「わかりました」

さらに別の場所で

場所はこれまた玉座の間のような場所（机と椅子が置いてあり誰かが座っている）

「ヤッホー」

するとまた、ボン！、というおととともに誰かが現れた。

現れた彼は

身長160センチ程で青髪、赤目、顔は中世適である。

「… お前か、どこに行ってたんだ？」

「んーちよとね」

「まったく、処分書書かされるこっちの身になってみる」

「いや」

「まったく、嫌に上機嫌だな」

「いやーいいことあつてねー」

「… 良いいこと？」

「そ、特異点見つけた」

「はあ?!」

「そんな驚くなよ」

「驚くわ！まだ時間はあるだろ?!」

「いやー多分第二の特異点だと思うよー」

「まったく、なにをしたら見つけるんだよ…」

と、椅子にもたれ掛かる

「気にしない気にしない」

「気にするはボケえ!!」

よくある日常

目が覚めたら知らない天井を見ていた。

「知らない天井だ（キリッ）」

まわりを見ると病院だった。

「やっと思きたのね」

「あ、永琳はん」

すると永琳さんがとなりに座ってた。

「あなた、三日も寝てたのよ」

「えっ！三日も!?!」

white!!?

「あなた、綿月さんの《霊斬》をうけて倒れたのよ」

「そーなのかー」

「そうよ」

「で、ここどこ」

「ここは病院よ、軍のね」

「へえー」

「で、はい」

すると永琳は封筒を渡してきた。

「?なにこれ」

「試験の通知よ、見てみなさい」

ビリビリ、ガチャ

(なんか違う希ガス)

すると紙には。

合格 Sクラス

—ツクヨミ様からのコメント—

がんばりましたね

以上

「これだけ!？」

「?、どうしたのよ」

「あ、いや、何でもないです」

「そう、あ、今日から学校の寮で暮らしてもらうから、はい鍵
鍵を 手に入れた」

「じゃあね」

永琳は消えた。

「あ?!」

すると看護師さんがきて

「なにかありましたか?」

と、聞いてきたので。

「あ、いえなんでもないです」

と、答えておいた。

(キット都市では人が消えるのは日常なんだろう、多分)

その後、病院を出た俺はゲーセンに来ていた。

ユーホーキヤツチャーとか、色々ある。

ついでにうるさい。

(さて、なんかかないかな)

マ○カとか太鼓の達○人とか。

すると太鼓の達○を見つけた。

「何であるんだよ!!」

「?!」

「あ、すいません」

他の人達が驚いたので、謝っておいた。

(さて、やるか)

(最初に太鼓○達人をやることにしてその後マリカをやることにしよう)

すると見たことない人が近づいてきた。

「ちよといいかな」

「あ、あなたは?」

「ミルザムって言うんだ☆よろしくね」

ミルザムと名乗った男は白い服に白いズボンを着ている。

「そ、そうですか」

「で、一緒にやっついていい?」

「いいですけど…」

「あ、お金は出すからいいよ」

「あ、ありがとうございます」

「じゃやろつか」

—————

《— 時 間

後》—————

「なぜ…勝てないんだ…」

「実力の差かな」

あのあとマ○カ、エアホッケー等々色々やったが勝てなかった、
解せぬ。

「で、君に聞きたいことあるんだけどいいかな」

「え、いいですけど…」

ぶるるるるるるる、ぶるるるるるるる

変な音がする。

「あ、携帯鳴ってる」

「携帯の着信音かよ!」

「もしもしー」

「お前なあ!、どこか行くなって言っただろうが!!」

「あ、ごめんね」

「謝るきねえだろお前!!とつとと帰ってこい!!!」

「はーい」

プツン

「そんな訳で帰らないといけなくなったから。またね」

ボン!

「またあ!?!」

よくある体力テスト

やつハロー

…… うん、キモい

自分でやつといてなんだけどキモいは、うん。

あ、皆様おはこんばんは、氷霧です。

今、俺は士官学校前にいます。

士官学校は大きく普通の学校の何倍ものサイズです。

しかも運動場が三個もあるんだからでかいったらあらしない。

「じゃあがんばりますか」

がやがやがや

教室の中には既に人がおり、会話しているようだ。

「おい、これ終わったらゲーセン逝こうぜ」「字、おかしくね」「おい、金だせ」「ボールを相手のゴールにシュート!」「ふっ俺は漆黒の翼、世界を滅ぼす者……」

……… なにこれ、怖い、てか試験の時に居た人達じゃないですかやだー

「おい席につけー」

がらがらという音とともに教室に来たのは背が高めの女性だった。

「えー私の名前は○斑○冬…… じゃなかった、平田 裕理だ、三年間よろしく頼むぞ、

そんな訳で体操服に着替えて第二運動場に集まれ、以上!」

すると、先生は普通にドアから帰って行った。

マジかよ、逝きたくねー、ふっ面白そうだな……

等の声が聞こえる

ちなみに今さらだかクラスの割合は女子：男子 2：8

である、解せぬ。

「えーこれから体力テストをおこなう！異論は認めん！」

「先生！質問いいですか！」

「なんだ！言ってみろ！」

「能力は使用してもよろしいですか！」

「かまわん、好きにやれ！」

「ありがとうございます！」

「ついでに霊力の使用も許可する！」

「ありがとうございます！」

★★★

百メートル走

「ふっ……！」

「すげえっ！背中からなにか出てきたと思ったたら一瞬でゴールしやがった！」

「化け物かあんた?!」

「ふっ……俺は漆黒の翼……俺に出来ぬことなどない！」

★★★

握力測定

「はあっ！」

ボン！

「すげえ測定器が爆発しやがった！」

「私にできないことはないっ！」（漆黒の翼とは違う人）

★★★

反復横跳び

「うあっあの人残像が見えないぐらいの速度でやってやがる！」

「ここは化け物の巣窟か!？」

（霊力で強化してるだけだけどなー）

「よしっ！今日はこれまでだ！家に帰って予習をするように！」

「「はいつー」」

「おい、少し話をしないか？」

帰る準備をしていたら自称漆黒の翼（笑）さんが話かけてきた。

「なんすか？速く帰りたいんですけど…」

「ふっそういう、な君は転生者だろう？」

「!!」

「そう驚くなよ、君もきずいていたんじゃないか？」

「は？」

「この”都市”には元の世界の漫画、ラノベ等がある、しかも再現可能な物は再現されている

おかしいだろう？」

「はあ、てか、何で俺が転生者とわかったんすか？」

「ふっ勘さ」

「勘かよ！」

「まあ、ふざけた話はこれくらいにして、本題に入ろう」

「？本題？」

「まあ教室で話す話じゃないから、どっか行こうか」

そうして俺は漆黒の翼（笑）さんと教室をでるのだった

Next phantasm……。

よくある会話

都市、喫茶店にて、転生者らしき男と話をしていた。

「で、話ってなんだよ」

「いやなに、腹を割って話そうと思ってね」

「腹割って話す？」

「そう、君が何をしたいのか知りたくてね」

「？」

「そう、転生者はハーレムを作る、国を作る、等いった目的の為に動くことが大い、

それを聞こうと思ってね」

「何をするものにも…… 特にない、せいぜいこの世界を楽しめればいいな、と思って居るくらいだしな」

「成る程ね」

「で、話は終わりか？」

「…… ああ終わりだ」

「そうかい、じゃ俺は帰るわ」

「素晴らしい俺は席をたち寮に帰っていった。」

「…ふう」

寮の自分の部屋に戻ってため息をする、というか色々濃かった一日だった。

士官学校行って、体力テストして、転生者と会話して、ホント疲れたよ。

「というか、あの話方だとまだまだいんのかね、転生者。」

「今日は疲れたし寝よう、うん。」

「お休みなさい」

「誰もいない部屋でそんなことを言い、俺の意識は消えたー」

「じゃあ会議を始めようか」

大広間の円卓にて、背の低い男が言う。

「会議なんてする必要あんのか？俺あ寝たいんだが」

「私も速く研究を進めたいのだが」

銃をもった者と、コートを着ていて体がでかい男が言う。

「お前たちはほんつとに急調整がないな」

「ふふ、まあ何時ものことじゃないか、さて、今回の会議は転生者に達についてだ」

「んなもんぶつ殺せばすむ話だろうが」

「いや、殺したら実験ができないじゃないか」

なととの的はずれなことをいう二人。

「お前らはそれしか考えられないのか」

背が高く、眼鏡を掛けた男が呆れ半分にいう。

「まあそれは問題ない、入るなら迎える、入らないなら放置、敵対するなら殲滅、それだけさ」

「さて、本題は別だ」

「あ？」

「あのやつが復活した」

「!?!」

その言葉に一同が驚く。

「はあ?!創造神に封印されてるんじゃないのか!」

銃を持った男が驚きながら言う。

「そう、封印されていたんだけどやつはそれを破ったらしい」
「ほう……」

眼鏡をかけた男が興味をもったような声でとう。

「それは、創造神を倒したということか？」

「いや、そこまではわからない、ただ復活したとだけ」

「はっそれだけかよ」

銃を持った男……ロード・ガンが呆れた声で言う。

「まあ復活した、ということが解かっただけでも収穫じゃないか」

「ああそれだけでも凄い」

眼鏡をかけた男とデカイ男が順にいう。

「まあそれは後々考えるところで、こここの設備等についてー」

会議はそんなありきたりなことを話ながら進む、これは転生の団と
いう組織での、ある日の事だったー

N e x t p h a n t a s m ……。

よくある卒業試験

あれから4年経った。

時間が跳びすぎ？文句は作者に言って、どうぞ。

さて、そんなこんなで今日はタイトルどうり卒業試験です。

面倒ですけどがんばります

説明になりますが

卒業試験は都市の外にある森に行き教師が置いた玉を持ち帰るというものだ。

ちなみに道中出てくるであろう妖怪は倒さないといけないらしい、解せぬ。

さらに一人でこの試験はやらないといけないらしい。

さて、そんな訳で今、森に居ます、めんどくさいけど頑張りますか。

三十分後

「これが玉か」

あれから三十分後、落ちていた玉を見てそう言った。

「とつとと戻るか」

「おーまた人間居るじゃん、ラッキー」

「?!」

その声に反応し、後ろを見ると。

そこに居たのは頭から角が生えて？おり、着物を着た男だった

「えーと、あなたは誰ですか？」

まずは平和的に、そう思いながら話かけてみると。

「あ？見てのとうり妖怪様ですよーとつ」

そういういながら急に殴ってきた。

「ガッ」

急に殴られたため反応できず、そのまま拭き飛ばされ木にぶつかる。

「お、耐えた」

男がそんなことをいう。

一方こちらはいきなをのの事だったので霊力を使えずもろに体にダメージがきている。

「んじゃもう一回とっ」

男がまた殴りにくる。

が

とつさに氷の壁を作り攻撃を防ぐ。

「おつやるじゃん」

男の声を無視して手の近くに氷の槍を作り、そのまま氷の槍をもち相手に投げる

「あつぶね」

が簡単に避けられてしまう。

「一つでダメなら百だ……！」

素晴らしい空中に氷の槍を百個程作り相手に向けて放つ。

「おっとと」

相手はまたも簡単に槍を避けている。

相手が槍を避けているうちに距離をとりながら氷の玉を空に作っていく。

「めんどくせえなあ……とっ！」

すると相手が気合いを入れただけで相手に向かっていった槍を全て消した。

「マジかよ」

さつき作った槍は少量ではあるが、霊力を込めてあったのだ、それを気合いだけで消すとは……

「で、次は何をするのかなあ？」

相手が舐めきった態度で言ってくる、めっちゃウザイ。

「こおするんだよっ！」

さつき作っていた氷の玉を相手に向かって放つ。

「それは見飽きたなあ」

だが、またも相手に避けられる。

が

「?!」

すると、玉が地面につく直前に、消えたのだ。

それに相手は驚いたらしい

「はっ?!」

更に相手は驚いた、消えたと思った氷は急に横から飛んできたのだ。

種は簡単、単に霊力を使い、地面に当たる瞬間見えなくし、既に見えないようにしていた

玉の術（見えなくなる）を解除。

これだけだ。

「うぜえわー!」

そういいながら相手は周囲を消滅させた。

「… マジかよ」

「めんどくせえから本気で行くぞお!!」

第二開戦、開始。

よくある卒業試験 後編

「もう少し…… あと少しだけ…… っ」

「なにがだあ!!」

そう叫びながら相手が殴りかかってくる。

が

「あ?」

その間に刀が飛んできてガギンという効果音とともに拳を止めた。

「まにあったか……!」

その人は綿月わたつき嵐我らんがだった。

「綿月さん!」

「速く逃げる!!」

「逃がすかあ!!!」

妖怪が妖力弾を撃つ。

が、遅い

「ちっ」

氷霧は既に居なかった。

「糞があ」

「靈斬!」

そこに、靈力による斬撃が飛ぶ。

「おっと」

「っ流石に避けるか」

「糞共があ……」

「あ、危なかったあ……」

あ、どうも氷霧 零です。

いや、ホントに危なかった、うん。

あ、因みに今は都市の中に居ます。

「氷霧!!」

「あ、カズキ」

そこに、カズキが来た。

「お前、大丈夫だったか!!?」

「大丈夫だよ、少し霊…力…つか…」

「お…い…!だい…」

そこで、俺の意識は消えた。

――――
「何処だ、ここ」

「あ、起きたのね」

すると、そこに永琳が来た、

「おはよう?永琳」

「はいおはよう」

「で、俺はなぜここに?」

今、俺がいる場所は病院だった。

「あなたがあのあと倒れてね、ここに運ばれたという訳よ」

「成る程、どれくらい寝てたんだ?」

「一日よ、別に肉体がそこまで酷い損傷をおっていた訳じゃないし、単純な霊力の使いすぎによる気絶よ、」

「なるへそ」

永琳さんマジパネエつす。

「じゃ、そういうことだから、さよなら」

「さよならー」

――――
その後、士官学校に行ったら。

色々と心配されたり、すごかったな!と言われたり、色々であった。

そして、今は士官学校の寮の、自分の部屋に居る。

「疲れたあ…」

と、コーヒーを入れて飲もうとしたとき。

「よっ!」

「ぶはああ!!」

窓から突然、赤い目、そして赤い髪をしている、ジャージを着た男

が現れてて、急に話しかけてきた。

「おー汚いなあもう」

「汚いって、あんたが驚かしたからじゃねえか！てかどうやってきた?!」

今さらだが、この士官学校は高度の結界が張っており、侵入することとは不可能。

「何って普通に来たけど?」

「普通ってなに?!」

「とりあえず、浄化^{クリーン}」

すると、さつき吹き出したコーヒーが消えて、綺麗になった。

「取り敢えず、俺は忠告に来ただけだから、そう警戒しなくていいよお」

男は、そう軽い口調で話しかけてくる。

「……………警告?」

「こそ、今度他の転生者達が色々やらすかもしんないから来たの」

俺は、その男の言葉を何故か信じる事ができた。

「じゃあそういうことだから、バイビー」

すると、男は飛んで行った。

「いったいなんなんだ……………」

取り敢えず考えても解らなかつたので、寝た。

よくある人妖大戦 ①

俺は卒業試験に合格し、そして十年がたった。時間が経ちすぎ？だって特に描写する事ないですしお寿司。さて、そんなことで今は周回任務の為都市の外にいます。

「ところでさーカズキ」

「ん、なんだ？」

あ、ちなみに今カズキと辻^{つじ}隼人^{はやと}といいます。

辻 隼人は最初にあつた転生者のことね。

「月移住計画って何時だっけ？」

月移住計画

それは、地上の穢れが多くなり、寿命がでてきたため、穢れ無き月に移住する計画だ。

「あーあれ、たしか一ヶ月後じゃなかったけ」

「違う、正確には一ヶ月と一週間後だ」

先にカズキが答え、次に隼人が修正する。

「ん、オーケーありがとさん」

さて、これからどうするか……………

「氷霧」

「ん？なに永琳」

永琳の家に遊びに行ったら、なんか永琳が真剣な顔で聞いてきた。

「あなた、月に行くきはあるの？」

「ん？なんでそんなこと？」

聞けば、元々都市の住人では無いため、行く気があるかどうか気になっただけらしい。

そんな永琳に俺は。

「月には行くよ」

そう、答えた

すると、永琳は。

「そう、よかった」

と、笑顔で答えた。

「で、何のようだ？隼人」

「なに、少し話たくてな」

永琳と話をした次の日、俺は隼人に呼ばれて、都市にあるカフェに居た。

「で、その内容は？」

まあ大方月移住についてだろうけど。

「お前が予想しているとうり月移住計画についてだ」

「心を読むな」

「で、お前はどうするんだ？」

「無視すんな、おい」

隼人に悪態をつきながら俺は考える。

「…………… そうだな、俺は月に行くよ」

「ほう」

「原作が開始されるまでは月でゆっくりするさ」

「…………… そうか」

隼人が少し寂しそうに言う。

「隼人はどうするんだ？」

「…………… 俺は地上に残るつもりだ」

「…………… そっか、でもどうやって地上に残るんだ？」

都市の人間が地上に残る方法等、無いに等しい。

「俺の予想では、恐らく人妖対戦が起こる、しかも都市の住人が月に行く日にな」

「え？、それって、二次創作での話だろ？」

「俺は独自のルートで情報を得ている、これは確定事項だろう」

「…………… マジっすか」

「マジだ」

「でも、それならなぜ？」

「恐らく、内通者が居るんだろうな」

「…………… 何でそんなことするんだろうな」

「そんなこと、本人じゃなきやわからんさ」

「砲撃用意!!」

あれから一ヶ月とすこしがたった。

そして、今、人妖大戦が始まる。

「撃てええええ!!!」

轟音が響く!」

さあ人妖大戦の始まりだ

よくある人妖大戦 ②

爆音が轟く。

が、それでも。

「やはり無理か……」

妖怪達は、減っていないかった

いや、減ってはいるのだろう、ただ、バカみたいな量の妖怪の数に減っているように見えないだけだ。

「第二波、用意！」

『ガアアアアア!!』

そこに、妖怪達の妖力による攻撃が飛んでくる

そんじやそこらの妖怪では傷ひとつつかない都市の兵器だか、万を越える妖怪達の攻撃には耐えられず、壊れてしまう。

「妖怪達よ！私に続けえ!!」

そこに、黒色のマントを着た骸骨が号令を下す。

「あ、あああ」

隣にいた名も知らない兵士が恐怖のあまり、立ちすくんでいる。

瞬間、その兵士の首がとんだ。

「え？」

行きなりの出来事に、唾然とする。

が

「ヒヤハアア！死ねえ!!」

そこにデカイ狼型の妖怪が突っ込んできた。

「はあ!!」

すぐに氷の剣を生成し、狼の首を飛ばす。

「あべし」

変な声をあげながら妖怪が死んだ。

しかし、急に妖力の砲撃が飛んできてきて、満足に防御も出来ずに受けてしまう。

そのせいで、都市の町にまで飛んでしまう。

が、そこは

「なんだ、これ……」

——妖怪達の、巣窟だった。
町は破壊されていた。

恐らく、妖怪達によつて

しかし、妖怪が都市の中にまでくることなどないはずだ。

「どうかね？この景色は」

後ろから、声をかけられた。

見ると、そこには妖怪に指示をしていたマントを着た骸骨がいた。

「これは私の能力でね、妖怪を転移させたのだよ」

聞いてもいないのに勝手に説明をする骸骨。

「私の能力は”転移させる程度の能力”生物だろうが非生物だろうが
転移させることができる力さ

凄いととは思わないかね？転生者君？」

……… 転生者のことを知っているのは転生者だけのはずだ

「お前は、いったいなんだ……？」

「私も君と同じ転生者さ、ただ、君達のように人間ではなく妖怪になっ
てしまったけどね」

「っ！」

「さあ楽しい楽しい殺しあいを始めようではないか!!」

そう叫ぶのと同時に妖力の玉を飛ばしてくる。

「ちっ！」

氷の壁を作り、それを防ぐ。

が

「甘いよ」

氷の壁が消えた?!

「はあ?!」

急に消えたため、迫っていた玉をよけれずに当たってしまった。

「くっ」

「遅いね」

直ぐ近くに転移したであろう骸骨によつて、蹴られてしまう、威力

が半端じゃなく、十メートル程飛ばされてしまう。

が、骸骨はそのすぐ側にいた。

「弱い、弱いね、それが天下の転生者の力かい？」

「なめんなあ!!」

直ぐに氷の剣を空中に十本程生成し、そのうち二本ほど相手にむけてうつつ。

「聞かないよ、そんなもの……っ！」

骸骨が氷の剣にむけて妖力の玉を打とうとした時に、骸骨の足元に氷の刺を作る。

「おっと」

しかし、骸骨はすぐ後ろに転移して避けてしまう。

なんだよその力

俺の力より圧倒的に強いじゃないか。

……… まあ切り札がないわけじゃないけど。

相手が転移して避けるなら、回避不能の攻撃をすればいいだけだ。

「アイシクル・ワールド氷結されし世界！」

……その瞬間、世界が氷らされた。

よくある人妖大戦 ③

「はあ…… はあ」

…… なんとか勝てたな……

回りを見れば全てが氷つっていた。

氷結アイシクルされし世界は回り全てを氷らせる技だ。

まあ範囲が広いせいで味方にも当たるのが弱点といえれば弱点になる。

骸骨を見れば、完全に氷つていた。

念のため、霊力でそれを砕く。

さて、皆は大丈夫だろうか……

そんなことを考えながら皆の元へ飛んでいくのだった。

「はあ…… はあ……」

都市の外にある森そこで彼

——フオルは逃げていた

あの戦場から。

（くそっ…… 舐めていた…… そこまで強くないだろうと侮っていたらこれだ！）

「よー少しいいか？」

そこに、一人の男が話しかけた。

「誰だ…… 貴様は……」

「俺のことはどうでもいいとして、（ハッ）どい？」

「答えになっていない！」

彼は怒りのまま妖力の玉をうつ。

普通の人間なら肉体が完全に消滅する威力の玉を

しかし、彼は冷静じつなかった。

少し考えればわかること。

妖怪ひしめくこの場所に。

なぜ人間の男が居るのかを。

「ふーん、死ね」

ドオン！

銃声が轟く。

その場所にはもう、誰も居なかったー

side 辻 隼人

「はあー」

魔力のレーザーを射つ。

それだけで妖怪が一気に減った。

だがすぐに他の妖怪がくる。

（くそっこれだけの妖怪が来るとは、想定外だ！、いや、水霧は無事なのか？…… ああもう邪魔だ！）

「ファイヤー」

炎の玉を射つ

現在、都市の軍は壊滅状態だった。

謎の女がレーザーをバカみたいに撃つたため、一部の者ー

ー霊力が使えない者以外は殆ど死んでいた。
しかも都市の一部が爆発するのは兵士同士が戦い始めるわ、最早軍として機能していなかった

その為、都市の壁は完全に破壊され、妖怪が入っていた。

まあ彼にとってはどうでもいいことなのだが。

彼は途中でこの戦線から離れるつもりだったのだ。

『兵士達に伝達、都市を捨て、今すぐ移動用ロケットに乗り、月に行きなさい、繰り返す、月にー』

さつきからこれだ、この指令を聞いているものなど、一割もないだろう。

「はあー」

空を飛び、ついでに妖怪を倒していく。

（っ居た！）

「氷霧!!」

side 氷霧

「氷霧!!」

なんか飛んでると名前を呼ばれた。

見ると、そこには隼人がいた。

「隼人、何でここに？お前も飛ばされたのか？」

「お前を探してたんだよ!!!」

「俺を？」

「もうすぐ」範囲殲滅爆弾「が落ちる！速く逃げるぞ！」

「マジで!?!」

範囲殲滅爆弾は着弾地点を中心に半径一万kmを”消滅”させる爆弾だ。

「いや、軍の皆は?!!」

「軍の奴等は全員ロケットで逃げた！とつとと逝くぞ!!!」

「わ、わかった！」

そして俺達は全力で都市から飛んでいった。

閑話 ① 『転生の団』

「おい、ミアプラ、何故転移させた」

転生の団の会議で、一人の存在が話題に挙がっていた。

「なに、『封印』状態の君じゃあ勝つのは難しいと思ってる」

「別に勝てない訳じゃなかったはずだ」

「…… 任務を忘れてないかい？君の任務は『ゼロ・グレイル』を探すこと、それなのに戦闘をするのはこつちにとつ「あーはいはいわかりましたよ」

「…… わかっているのなら追求はしないでおこう」

「てか、ゼロの奴ホントにいるのかあ？」

「さあ、一度反応があったただだからね、確信はない」

「まあ、一様搜索は続けたらいいんじゃないかな☆」

「…… それもそうか、なら、誰が搜索する？」

「ロードは駄目だろ、任務忘れて戦うからな」

「ちっ」

「搜索するのはいいが、こつちに研究資金をよこせ、まだたらん」

「別にいいが、なにを作っているんだ？」

「なに、ただの大量殺戮兵器さ」

「殺戮兵器…… 何に使うんだい？」

「なに、念のため作っているだけだ」

「念のために作るものじゃねえよな、それ」

「気にするな」

「気にするわ!!!」

「アホばっかりね……」

最高幹部の唯一の女は、そんなことを言っていた。

「ああ…… 疲れた……」

会議が終わり、それぞれが自分の部屋に戻ったあと、自室で、倒れ

ている者がいた。

「キャラ…… 変えようかなあ……」

「……ミルザムである

彼はキャラを作り、ウザイキャラでどうしてあるのだ。

まあ中身はただの一般人であるが。

「入りますヨット」

そして、ノックもせずは何者かが入ってきた。

「……なっ?!ゼロ・グレイル?!」

先程の会議で、問題視されていたゼロ・グレイルである。

「はじめまして、ミルザム君、そして君に相談があるんだけど……」

「……」

「ここはこうして…… いやここはこうした方が効率が……」

SFアニメの研究室のような場所。

ここは転生の団にある研究室、そこで『アンダレス』が会議で言っていた機械を作っていた

「やあアンダレス、少しいいかな☆」

「むっミルザムか」

「君が作っている機械、貸して☆」

「ふむ…… まだ稼働実験もなにもしてないので、嫌なのだが……」

彼が作っている機械は、まだ完成されていなかった。

「じゃあ僕が稼働実験とかやるからさ☆」

「…… なら、いいか」

「ありがと☆」

「…… 彼等は知らなかった、この選択が、更なる絶望を呼ぶことになることを……」

閑話 ② 『力を持つ成金と不運な転生者』

side ???

「うつわwwwなにwwこれwww」

俺は今、地上から千メートルも離れた空にいた。

そして、下で行われている人妖大戦を覗いていた。

「とりあえず近くでみますかwww」

そう言いながら、都市にある建物の上に降りた。

そしたら

「そげぶー」

ー下の人に人がいた。

運がいいのか悪いのか、俺はその人の真上に居たらしい。

そしてそのまま降りたため、踏んでしまったと。

踏んだままだと悪いので、とりあえず足をどけた。

「てめえ何しやがる!!」

すると、その男は立ち上がり、俺に文句を言ってきた。

「いやメンゴメンゴwww着地地点に人居るとは思ってもいなかった

でゴサルンゴwww」

「ぶっ殺す!!」

「口悪いなおいwww」

「うるせえ!!悪いのはお前だろうが!!」

ぐもつともである。

相手が殴りかかってきた。

相手の拳が俺に

当たった。

「安部師!」

と、言いながら吹き飛んだ。

「……弱!」

すると、相手は驚いたのか、口をポカーンと開けていた。

「やったぜ」

「いやそれ俺の台詞!」

俺がやったぜと言ったら怒られた、解せぬ。

「んで？君は何者でござるか？」

「俺は妖王だ」

なんと、意外にも答えてくれた。

「どうか、なんだ、お前の格好」

「気に入るな☆」

「気に入るわ!!」

さて、ここで俺の格好についてかたろう。

俺の着ている服は、赤い、これでもかかってくらい赤い、全体的に。

これだけなら、「赤い服だな」で終わるだろう、

しかし、身に付けている物が可笑的い。

まず、宝石

ダイヤモンドやエメラルド、ラピスラズリ等々、服の至る所に、高価な鉱石がついてある

そして、宝石の指輪を着けている。

……なあにこれえ。

ただの変態である。

まあ、この格好をしているのは俺なのだが。

「んでー妖王さんなにしてるの？」

「……この戦いを観てるだけだ」

「観るだけじゃ詰まらんでしょ、とっ」

そう言い、俺は妖王を蹴った。

あくまで、善意のつもりで。

観るだけじゃ詰まらないだろうと、思っ

しかし残念。

「氷結アイシクルされし世界ワールド！」

下に居た少年がそう叫ぶとあら不思議、回りが凍るじゃないですか。

「ん？までよ」

もしかしたら、と思いいながら見ると。

――妖王が凍っていた。

「やべえ…… やべえよ……」

あかん、これ、怒られるやつや。

三十分後

「てめえおぼえとけ… ヘックション！」

あのあと、氷を炎で慎重に溶かした、そしたらやつぱり怒られた。

「いや、ねえあんなことなるって、誰が予想するよ」

「いや、霊力の上昇わかるだ… ヘックション!!」

「わーを寒そうだねー可哀想だなあ（棒）」

「お前のせいだろうが！へ、ヘックション!!!」

しかしあの少年…… あいつなら、あれを倒せるかもしれない。

そう、俺は思いながら、笑うのだった。

閑話 ③ 都市の整備士 吉田の一日

都市にある組織の一つ、軍、それには、いくつか部がある。

『戦闘部』綿月嵐我をトップとし、妖怪と戦う部隊また、氷霧や隼人等もここに所属する。

『経営部』軍の経営を支える部隊、おもに金稼ぎをしている。

『技術部』軍の兵士が使う武器を作ったりする、が、最近、テーパークを作ったりしている。

さて、今回のお話は、『技術部』にいる、一人の転生者のお話……

side 吉田

パソコンや工場や機械やらがある場所。

ここは軍がもつ施設の一つ、ここは、まさにSFといった設備がある。

ここにくるたびに、ファンタジーどこ行っただけと言いたくなるような場所だ。

ちなみに、俺は転生者だ。

元は某運送会社で社畜をやっていたら、神？に殺されてきた。

その神は「お前殺してやったぜくワイルドだろお」と、一昔前のネタを言っただけだ。

まあ、ムカついたので殴ったが。

そしたら、なんの説明も無しに、「お前なんて転生すればいいのよ！」と、転生させられた。

まあ、社畜をやめたので良かったが。

そして俺はこの都市の軍に所属し、武器を作っている。

主に妖怪用の。

「吉田さん！居ますか！」

すると、そこに綿月依姫様がきた。

「依姫様」

「もう！様づけしないですって言ったじゃないですか」

「ははは、すみません」

何故、彼女を様づけするかと言うと、彼女は、俺の上司……綿月嵐
我の娘なのだ。

しかし、綿月依姫様と言ったら怒られるので、依姫様になっている
のだ。

「して、依姫様、いったいなんの用で」

「刀が折れてしまったので、その修理にと」

「わかりました」

そう言い、刀を見る。

一見、普通の刀だか、違う。

まず、霊力増幅 これはそのまま、使用者の霊力を増幅するもの
だ。

次に、自動修復、これは霊力をこめることによって、自動で直る機
能だ。

他にも、自動迎撃システムやら霊的シールド等々。

全くもって意味のわからない刀である。

まあ、作ったのは俺だが。

「どうですか？」

「んー色々やられていますね、配線切れていますし、メインシステムも壊れ
ています、これ、一から作り直した方がいいですよ」

「そうですか……」

依姫様はシユンとしてしまう。

「ありがとうございます」

「いえいえ」

あれから約三十分後

「吉田、いるか」

「いるぞー」

そこに、同じ転生者の隼人君が来た。

彼に聞いたところ、転生者はいっぱいいるらしい、やったぜ？

「お前に作ってもらったこれ、実に最高だ」

「そうか、それは良かった」

なんと、彼は転生特典を持っているらしい。

その特典は『魔力を扱う程度の能力』だ。

この能力の欠点として、霊力が使えないらしい。

正確に言えば、霊力が魔力に変換されるそうだが。

そんな訳で、俺は彼専用の武器を作ったのだ。

その名も『ショートソード』剣である。

まあこれも宜しくいくつも機能がついてあるが…

「あついていた！隼人！お前総隊長に呼ばれてるぞ!!」

「む、そうか」

そこに青い髪の… たしか氷霧君だったかな。

「すまない、用事ができたようなので、帰らせてもらう」

「おう、じゃあなあ〜」

さてと、じゃあ……………

「都市の科学は世界一いい!!」

第二章 放浪編

第一話 『修行と進化』

オッス！おら○空！

と、ネタはおいといて。

今現在絶賛飛行中なぜって？それは

「おい隼人！あと何分で落ちる?!！」

「知るか！とにかく急ぐぞ！」

都市から逃亡中なう。

見事に脱出用ロケットに乗り遅れた俺は、都市から逃げているのである。

なんと、あと数分で、ここら一帯が消滅するのである。

吉田のおっちゃん、なんてもん作りやがる…

そしてふと、俺は思い出した。

「おい！お前脱出用の術作ったとか言ってなかったか?!」

「あつ、そうだった」

「おい！」

「すこし待ってろ！」

そう言いながら、彼は手のひらに魔力？を集める。

すると、なにか黒い穴ができました。

「これにはいれ！」

「了解！」

そして俺は、その穴に入った。

「ここなら、大丈夫だろう」

抜けた先は、洞窟だった。

「… ホントに大丈夫なのか？」

少し不安になり、聞いてみる。

「なに、ここは都市から二万キロ離れているし、もしもの為に幾つか結

界を張ってある、そうそう壊れることはないさ」

「……それならいいけどよ……」

やはり不安だ。

吉田さんはいつもいららない機能ばかりつける、ゆえに不安なのだ。俺が乗る予定だったロケットにも、色々と機能がついてあるらしいし……

「して氷霧、お前はどうする?」

その問いに、俺は。

「こうなったら、せいぜいこの世界を楽しむとするさ」

「……そうか」

なぜか隼人が、安心したような笑みをする。

「しかし氷霧、お前……どうするんだ?」

「え?どうするって?」

「いや、お前は不死じやないから長いこと生きれないし、食料とかも必用だ、あと住みかも」

「………あ」

「……考えてなかったのか」

――――
次の日から、俺は修行することになった。

何でも、隼人が言うには能力を進化させ、不老にする、とのこと。

俺は「そんなのできるのか?」と聞いたが「できる」と自信満々で言ってきた。

俺たち転生者の能力は一定の条件を満たすか、鍛え上げれば進化するらしい。

なぜそんなのを知ってるか聞いたら「俺は神と通信できるからな」と、どや顔でいつてきた。

以下、修行風景ダイジェスト。

VS ティラノサウルス

「いや無理だろ!」

「がんばれー(某)」

使い魔として召喚された恐竜との戦い。

躍り、

「ワンツーハイ！もう一度！」

「ワンツーハイ！」

「腰が入つとらん!!」

なぜか踊つたり。

VS知らないおっさん

「にーげるんだよースモーキー!!!」

「逃げるなあ!!」

なぜか現れたおっさんと鬼ごっこ（捕まったら死）

e t c . . .

まあ、色々あったわけで。

なお、これらの課程全て五年でやりきった。

「ん？」

いつもどうり修行（恐竜×100とのデスマッチ）を終えた俺は、洞窟でごろごろしていた。

そしたら、手紙が落ちてきたのだ。

これはあれかな？某問題児世界のやつかな？

手紙の内容を見る、それには。

『にゃんぱすー』

そんなこんなでお久しぶり、お前さんを転生させた神様じゃよ、

今回は能力が進化したので、それのお知らせじゃ

進化した能力は「氷を司り、氷らせる程度の能力程度能力」

まあ、お主の能力の上位互換といったところか。

これを使えば不老になったりできるぞ。

それではのー

b y 神様』

…： なあにこれえ。

いや、進化したのはいいんだけどさあ…：なんか、凄すぎるような

希ガス

「もう……逝くのか？」

「ああ、行く」

あれから数億年たった。

これについてはまあ、単純に進化した能力を使って、不老になっただけである。

単位が億なのは、間違いではない。

「そうか……じゃあ」

「ああ、行ってくる!!!」

俺は、洞窟を、出た。

第二話 『希望となりうる者』

むかしむかしのあるところにて?◆の▼という??がありました
それは、◆●○に作られたイ■△□?◎◀●・?○テ■でした
そして?◆の▼は命令されたことを実行しようとした
しかし、これに抗う者がいた
その者は♣▼と呼ばれていた
しかし、その者でも倒すことは出来なかった
そして彼は?◆の▼を封印した
しかし、封印される瞬間、?◆の▼は別の世界に逃げてしまった
そして?◆の▼は、元の世界に帰ろうとさ迷うのであった
……………
いつまでも……………
いつまでも……………

「……なんだ、あの夢」

旅にでて早一週間。

野宿していたか俺は変な夢を見た。

全く内容がわからん夢を。

まあ、気にしても仕方がないので、テント……
というか氷のかまくらからでる。

するとそこには、変態がいた。

「にゃんぱすー」

「にゃ、にゃんぱす?」

疑問符がついたけど仕方ないね、変態だから。

さて、相手の服装を見てみよう、着ている服は、赤い、これでもかつてくらい赤い、全体的に。

だがこれだけなら、「赤い服だな」で終わるだろう。

しかし、身に付けている物が可笑しい。

まず、宝石

ダイヤモンドやエメラルド、ラピスラズリ等々、服の至る所に、高価な鉱石がついてある

そして、宝石の指輪を着けている。

変態だ（確信）

「君にプレゼントだ、ホイ」

そっくり、変態は指輪を渡してきた。

「いりません」

俺はホモじゃないからね、しかたないね。

「速く着けるんだあくしろよ」

そっくりながら変態は無理矢理指輪を着けてきた。

「えっ……これ外れないんだけど！」

「呪いの装備だからね」

しかも嫌なカミングアウトしてきやがった。

「ちよまつえっ!？」

すると変態は、消えた。

「何だったんだ？、あの変態………」

俺はそう言いながら右手の中指につけられた指輪を見るのだった。

――後――にその指輪に助けられることを俺は知るよしもなかったのだった。

「あ、もしもしゼロちゃん？ちゃんとおげといたよー」

「え、嘘、マジかよ」

「あーハイハイ、頑張りますよ、」

「元あんたの部下だからねー嫌でも頑張らないとね、」

「イヤー、まあ、楽しんでないかって言われると否定できないなー」

「そこは否定するべきって、仕方ないね、ボク正直ものだからね」

「え？あーハイハイ、わかりましたよ」

「え？見込みはあるかって？……… あるんじゃないかな、

そのうち化けるだろうね、彼は」

第三話 『よくある話』

「だいぶ歩いたな……」

俺が旅をして約1ヶ月。

大分目的地に近づいてきた……と思う。

「ん？」

なにかを感じた時にはもう遅く、気づいたら空を見上げていた。

「……………は？」

あ、これ落とし穴か。

誰のイタズラだ、まったく。

空を飛び、落とし穴からでる。

空を飛べる俺にとつて、落とし穴等無意味よ、ワハハ。

ズゴン、と音がなる。

目の前から、丸太が迫ってきていた。

「フア?!」

ギリギリで避けるも、それだけではなかった。

空から竹槍が降ってくる。

「あぶねー!」

咄嗟に氷の盾を空に生み出し、防ぐ。

と思ったら横からきた丸太に吹き飛ばされた。

「んだこれ?!」

飛ばされたところは、溶岩。

またもギリギリで飛び、落ちるのを防ぐ。

「んったく、なんだここは……」

いや、マジでなにこれ?

あれから約三十分後、ようやく、あの魔のトラップゾーンを抜けた俺は、目的地が見えたことに、一種の感動を覚えていた。

途中、ヤラナイカといつてくる妖怪を倒し、

イキスギイとか言う色々危ない妖怪を倒し、

ハハッ僕ミツキ〇マウスとか言う色々、主にD社が恐い妖怪から逃げたり。

いつぞやの宝石つけた変態から逃げたり。
と、色々なことがあった。

だが

「ようやくついたらぜ……」

長野県に！」

そう、諏訪湖の前で言うのだった——



——死体の山で、一人の男がお茶ティータイムの時間を楽しんでいた。

「ハリーハリー！もつとお茶を！」

死体の山だと言うのに、男は気にせず茶を飲む。

死体は老若男女関係なく、妖怪も人間も転生者も関係無く積み上がっている。

そんな死体の山でテーブルを用意し茶を飲む男は、狂っているのだろう。

いや、狂わないといけないのだろう。

「はてさて、諏訪大戦ももうすぐ終わり！あとは！後何かすることはあったか?!」

誰も居ないのに、誰かに問い掛けるように話す男。

「あとは……そうだ！オリジナルストーリー！作者奴が考えた実にくだらストーリーない物語だ！」

「しかし何故？ どうして？ 奴はあんなにもくだらない物語を書いてい
るのだ？ そこが昔から理解できん」

男は、誰にも理解出来ないことを話す。

友に話すように。

「はてさて、そろそろ文字数稼ぎが終わった終わりの時だ」

男は、寂しくなるな、と小さい声で呟き。

「ではまた会えたら会おうじゃないか！ 理解者読者たちよ！

一期一会の、トゥルツトルー！」

男と死体の山は、消えた。

第四話 『謎の軍勢』

「さてどうするか……」

俺は今、諏訪市（仮）の前の門で少し考え事をしていた。

それは、どうやってこの町に入るか、だ。

…… 入る為の問題点をあげていこう

まずここは昔、よって身分証とかは必要ない。

よってクリア、次に、俺の風貌は怪しい。

服装が現代ポイツ： どうか現代そのものも。

ジャージを着ているため、この時代の人からしたら、怪しさ満点だ、
やったぜ。

更に、俺の容姿だ。

基本的に日本人は黒目黒髪（この時代の人は知らんが）、だが俺は青
い髪に青い目。

誰がどうみても外人です、ありが（re

…… そんな訳で、現在お悩み中という訳である。

「……ん？」

ふと、後ろに妖力を感じた。

雑魚妖怪でも現れたのだろうか？

後ろを見る、そこには。

「…… WAON」

——地平線を埋め尽くす程の妖怪がいた。

「諏訪子様！またやつの軍勢が現れました！」

「そうか、わかった、すぐに行く」

諏訪湖にある神社にて、二人の人間——

——いや、一人の人間と神がいた。

「また……か」

神の顔は、悲しみに溢れていた——

「そおいー」

巨大な氷の剣により、妖怪が吹き飛んでいく。

先程妖力を感じ、後ろを見たら妖怪が無数にいたため、現在無双中というわけである。

にしても……

「どれだけいるんですかねえ……」

倒しても倒しても沸いてくる。

なんなの？ ホントなんなの？ ゲームの無限湧きかコノヤロー

「行け！ ミシヤグジ様！」

「おおう?!」

いつの間にか空にいた幼女が叫ぶと、何処からともなくデカイ白蛇数体現れた。

そしてその白蛇は妖怪達を蹴散ら…… おい、今ビーム打ったぞ。

「その人ー」

「ハイ?!」

「後で私の社に来て！」

そう言う和金髪の幼女は飛び去っていった。

……

彼女が洩谷 諏訪子だろうか。

「旅の人、私達の村を助けて頂き、ありがとうございます」

「いえいえ、おきになさらず、人間、助け合いですよ」

あれから村の人が来て、お礼がしたいと言うので、ついていったら、そこそこ大きい家に案内され、

村長らしき人に礼をされていた。

「おお… そう言ってくださると助かります、なにせこの村は、…」
「?この村は?」

気になり、問う。

「……戦争をしておりますので
村長は、とんでもないことを言った。」

閑話集 二

閑話『陰謀』

「このゴミがあ!!」

「ガハッ!」

一人の女性が蹴られ、吹き飛ぶ。

その女性の容姿は。

髪は紫かがつている青髪。サイドが左右に広がった、非常にボリュームのあるセミロングだ。

瞳は茶色に近い赤眼。

服は、全体的に赤いシルエットだ。上着は赤色の半袖で、袖口は金属の留め具で留めている。上着の下には、白色のゆったりした長袖の服を着ている。

小さな注連縄を首元、白い長袖上着の袖、腰回り、足首、とあちこちに巻いている。

スカートは、臙脂色のロングスカート。裾は赤色に分かれており、梅の花のような模様が描かれている。

彼女は、一人(?)の神だ。

しかし、その美貌は、見る陰も無くしている。

まず、所々腫れた肌。

更に痣、怪我、充血 e t c e t c . . .

等々、もはや生きてるのが不思議なくらいの怪我をしている。

「クソガア!!」

そしてその女性を男は踏み続ける。

自分の怒りをぶつけるように。

「クソガア!クソガア!!クソガア!!!クソガア!!!!クソガア!!!!」

何度も何度も踏みつける。

自分の怒りをぶつけながら。

「おい、ゴミ、次ミスったら」

一つ置き

「……わかるな」

「わ、わかり……ました……」

「よし、わかったなら、行け」

「はい……」

女は逃げる様にその部屋から離れ。

「誰か……助けて……」

――八坂神奈子は助けを求めた

「やつハロー☆」

「ミルザムか……なんのようだ？」

突如現れた者に対し、男は平然とした態度で問い掛けた。

「ん？イヤー前回も失敗したらしいき、こっちの助けてが必要かなーと」

「ふん、貴様等の助けなど要らんわ」

「イヤー人の助けは素直に受け取れって言われなかった？」

「ふん……」

男は少し考え。

「ふん……気に入らんが、貴様等の助けが必要なのも事実、ここは受け取ってやる、感謝しろ」

男は傲慢な態度で返事を返したが。

「良いつてことよ★」

そう言うと、ミルザムは現れた時と同じように、消えた。

「やはり、気に入らんな……」

男はそう、呟いた。

「やつとだ……やつと始まる……」

「つたく、あのジジイどもの言いなりになってんじやねえか、らしくね

えなおい」

「イヤー自分の尻は自分で拭かんといかんでしょ？」

「… それにしても、こんなやり方で良かったのか？」

「露骨に話そらしたね、君

…ま、これくらいしかやり方が無いんだよ、あのジジイども、俺
がやること嫌がってるし

…今度喰おうかな、あいつら」

「喰ってもいいんじゃない？」

それにしても、漸くか…意外と時間かかったな」

「ま、時間かかったのはしゃーない、

…やっぱ喰おう、あいつら」

……二人は笑いあっていた。

第三章 ちよと変わった諏訪大戦

これまでのあらすじ

突如死んでしまった氷霧 零。

しかし、テンプレの神と名乗る者により、転生する。

転生した世界は東方 project。

時代は月の民がまだ地上にいたころ。

そして転生した場所で、八意永琳に会う。

永琳の案内で、都市を治める神、ツクヨミに会う。

氷霧は、ツクヨミの提案で、軍に入る。

軍に入ってはや数年。

人妖大戦が始まる。

その戦いで氷霧は月移動用ロケットに乗り遅れてしまう。

結果、地上で暮らすことになった。

能力を使い不老になり、旅をする氷霧。

目的地は長野県諏訪市。

諏訪子に会いに行くのだ。

その道中妖怪にあつたり別の世界の住人にあつたり等々。

そしてようやく諏訪市（仮）に着いた氷霧。

これからどうなるのか?!

―――――――――― 後書き担当の闇斬だ」

作者「リア充爆発しろ、作者です」

闇斬「第一声がそれかよ……」

作者「いや、だってマジ意味わかんない、キリストの誕生日?にい

ちやつくとか、マジ意味不明」

闇斬「哀れな非リアの叫びだなあ… てかなぜこんなの書いたの？」

作者「非リア言うなし… まあ、こういうのあった方がいいかなー
と思つて、書きました

ていうか今見ると第一章とかの文、マジわからん… 昔の私はなぜこれがいいできと思つたのか…

そんな訳で、一章、二章を読まなくていいように書きました、まる
闇斬「まあ、そういうもんだろ、てか作者、これからも章ごとに書
いてくのか？あらすじ」

作者「いえ、今回だけですよこんなの… ヤバイ、昔の文思い出し
たら恥ずかしくなつてきた…」

闇斬「てか、何で今回あとがきじゃないんだ？」

作者「単に文字数稼ぎですね、あれだけだと足りないので」

闇斬「あつそう」

作者「反応冷たいですねー」

あ、あとなろうの方に短編投稿したので、よかつたらそつちも読ん
てください」

闇斬「露骨な宣伝で草」

作者「あと、どうしよう… 書く内容なくなつてきた…

そんな訳で以下、この作品を読むにあつての注意事項です」

この作品は原作が始まりません、過去の話のみです。

オリキャラが多いです、これでもかつてくらいいます。

ていうか大半がオリキャラでできてます。

原作キャラは一部しか登場しません。

原作設定一部変更。

よくわからない設定や、詳しく書かれてない設定、明言されている
設定等、色々変わっています。

駄文、駄作です、読む価値ありません。

作者が中二病です。
技名とか中二病です
作者「それでは、またいつか会いましょう。
それでは、とう！」

第一話『戦争』

カツ カツ カツ

俺は今、洩谷神社えの階段を登りながら、考えていた。それは、村長が言っていた『戦争』についてだ。

時期的に見れば、神奈子との戦争？に思えるが、神奈子は神だ、神がなぜ妖怪を？

普通に自分より下位の神や、信者を使ったりした方が良いはずだ。下手したら『神が妖怪と手を組んでいた』

と、噂される可能性がある。

よってまずない。

ならば、他の転生者か？

これならば、あり得る。

俺を転生させた神は、「転生者はいっぱいいる」と言っていた、ならばこれだろう、確実に。

まあ、オリキャラとかの可能性もあるが……

「ん？」

どうやら考えている内に、着いたらしい。

見た目はそう……豪華。

出雲大社を小さく、そしてコンパクトにした見た目だ
ううむ……俺作者が見たや現実の守谷神社つとは大違いだ。

回りにはゴミ一つない、綺麗な場所だ。

まさに神が居る場所に相応しいと言える神社だ。

「やあ、待っていたよ」

すると、襖？を開け幼女が現れた。

容姿は原作同様。

金髪のショートボブで、

青と白を基調とした『壺装束』だったかと呼ばれる格好をしている。

「やっハロー」

「や、やっハロー？」

あらやだ可愛い。

心なしかケロちゃん帽子も困惑してる様に見える。

「んで、幾つか聞きたいことがあるんだが？」

「…うん、それについては、奥で話そうか」

その後、奥に案内され。

「さて、じゃあ話そうか」

「おう、話せ話せ」

「… 神相手に偉い態度だね、君」

「気にすんな」

「… この国は、今戦争をしているんだ」

諏訪子が、気まずい表情で話始める。

「最初に、妖王っていう奴が妖怪を率いてきたんだ。

そして町を破壊した」

「は？」

え？神だろお前？妖怪に負けたの？

いや、神以上に強いのか？そいつは？

… だとしたらやばくね？

いや、諏訪子が弱いだけだろう、多分。

「そして、やつはこう言ったんだ… 「ふん、つまらんな、原作キャラ
とやえど、この程度か」
て」

はい誰がどうみても転生者です、ありが（re

… といか、なにやってんだよ、おい。

「そのあとは一週間ごとに妖怪が攻めてきてるんだ
千や二千じゃない、十万やそれくらいの数が」

「わお」

なにそれ多すぎ、なんでそんないるん？

「だから… この国から離れたほうがいい、この国は、危険だから」

「大丈夫だ」

「え？」

俺の声に、驚いた顔をする諏訪子。

「^{転生者}だが。同胞がバカやらかしてんだ、止めなきやいかんだろ」
「……こうして俺は、この諏訪市（仮）で暮らし始めるのだった。」

第二話『神』

「おらあ!!」

巨大な氷の剣で、妖怪どもがぶっ飛ぶ。

「伏せて!」

諏訪子の声が反応し、後ろに飛ぶ。

その前を、デカイ白蛇が過ぎていった。

「めんどくせえなあ……」

死んでいく妖怪を見ながら、そんなことを呟くのだった。

「……あれから一ヶ月。

諏訪子と暮らしながら、もう一ヶ月もたった。

別段、気にすることもなく、普通に暮らしていた。

恋愛イベントなどなく。

べ、別に期待してた訳じゃないんだからね!

と、冗談はおいといて。

実際、特に無かったのである。

いや、妖怪どもが攻めてきてるが。

「あくだるい」

そんな、俺が与えられた部屋でゴロゴロしながら諏訪子が帰ってくるのを待っていたら。

トゴオン!!

という音が聞こえ。

「またか……めんどくせ」

そう言いながら、飛んでいった。



「……………なんだこれ」

目の前に広がる軍勢を見て、俺はそう呟いた。これまでではT H E妖怪な見た目のやつしか居なかったが、今回は違う。

オーク、ドラゴン、スライム、木の精霊、飛竜、e t c e t c
今回は、西洋風の妖怪で埋め尽くされている。

見た目が変わっただけか、それとも本物のファンタジーのモンスターか……………

実にめんどい。

そして、空にいる、デカイドラゴン。

全長二百メートル程だろうか？それぐらいのサイズだ。

そして見た目は西洋……………というか、ゲームにでてくるドラゴンそのもの。

そして緑色の鱗をしている。

その上から、神の力、神力を感じる。

あ……………これは流石に想定外デス。

もしかしたら件の妖王は神なのだろうか？

もしくは、神と妖怪が手を組んでいたのか？

「全軍」

女の声が、嫌に響く。

「進軍せよ!!!」

妖怪どもが、突進してきた————

◆

「おらあ!!」

巨大な氷の剣により、妖怪（仮）どもが吹っ飛ぶ。

剣を振るうが、全然減らない。

「お待たせ!!」

「おっせえぞー！諏訪子!!」

ようやく諏訪子が来たらしい、しかし、その後ろには、見たことない幼女がおり————

『神の裁き』

幼女がそう言うと、空から雷が落ちてきて、すべての妖怪を蹴散らした。

「なっ……」

流石にこれには声がでない、これだけのこと、不可能だ。

数十万の妖怪すべてに雷を落とし、そして殺すなんて、普通無理だろ……

いや、空飛んでる竜^{ドラゴン}は生きてるわ。

「さて、貴方が氷霧さんですね？」

ツクヨミと諏訪子が世話になりました」

「あ？」

ツクヨミのことを呼び捨て？そこらの神が？

ツクヨミは一樣最高神の一人、なのになぜ？

「あ、自己紹介がまだでしたね、私は天照大神^{アマテラスオオカミ}、気軽に天照と呼んでください」

そう、天照は笑うのだった——

第三話 『理由』

空から、ゆっくりと、一人の女―八坂神奈子が降りてくる。

…まさか神奈子だったとは、神が妖怪に下ったのか？

しかし、顔は暗く、下を見ている。

「久しぶりですね、神奈子」

「…… お久しぶりです、天照様」

「何故、こんなことを？」

「…… 言えません」

「神は人々を妖怪から守る存在ということをも、忘れたのですか？」

「…… ダマレエ!!」

「デカイ柱―御柱だったかをだし、俺に向かって放ってくる。

… いや俺え?!

「ちよー!」

すぐさま氷の剣を生成、それで御柱の軌道をずらし、防いだ。

「… なにをするのですか、神奈子!!」

そしたら天照が一気に神奈子に近づき、腹パン。

神奈子は倒れた。

「…… えっ!」



あのと、倒れた神奈子を俺が担ぎ、諏訪子の家の空いている部屋まで

運び、布団に寝かせていた。

「で、何であんたが居るんだ? 天照」

「なっ……」

諏訪子が驚いているが、キニシナーイ。

「まあ、単に頼まれたからです、諏訪子に、妖怪の侵攻が酷いので、助けて欲しい、と」

「あ、天照様！」

うーむ、普通の理由だな。

しかし、美人だなあ。

腰まで伸びた赤い髪、傷ひとつない肌。

身長は百三十センチ程。

そして赤い目。

更に、赤い服に赤いスカート。

個々まで赤を象徴されると逆に凄いわ、うん。

そしてさつきから諏訪子と言いかいをしている。

内容が「最高神の自覚は」とか「ただの人間に対する態度じゃない」とかあるが

気にしないようにしよう、うん。

「う、うーん」

「あ、起きた」

「!!」



「さて神奈子、妖怪に与していた理由を聴かせて貰いましょうか」

「それは、言え「あ、呪いは解いたので問題ないですよ」えっ」

呪いかかっていたんかいワレエ?!

いや、そうじゃないと妖怪に与していないか。

「あれは……5年前でした」

そして神奈子が、ゆつくりと、語りだしたー

◆ 「……む？」

それは、神奈子が何時もどうり、自分の社で、のんびりだらだらしていた時だ。

神奈子は、もの凄い量の妖怪の反応を捕らえた。

(またか……)

そう、これはいつもの事だ。

最近になり、妖怪が活発化したのか、よく妖怪が町に攻め行っている。

——しかしいつもと違った。

妖怪の量は変わらない、約二百匹程。

——だが妖力の量が違った。

いつもはただの、そこらにいる雑魚程度の力しか持っていなかった奴ら。

だが、どういう訳か、大妖怪レベルの力を持っている。

すべての妖怪が。

「なっ……」

流星にこれには驚く。

二百近い妖怪全てが、大妖怪なのだから。

「ほう、お前が八坂神奈子……か、予想以上に

——弱いな」

◆

「そのあとは…… 妖王に呪いをかけられ、僕として使われました……」

「なんと言う……ッ」

神奈子が話した内容は、予想外だった。

いや待って？なんで二百もの大妖怪が一人(二匹?)

の妖怪にしたがつてるん?

まさかの妖王とかいうやつ有能力?

だとしたら無理くね？

「わかりました…… 妖王を倒しましょう！

さあ行きますよ諏訪子さん氷霧さん!!」

「えっ」

——こうして俺達は妖王退治に付き合わされるはめになったの
だった。

第四話『Q. ダンジョン攻略で最もやってはいけないことは?』

「ここか……」

あのあと強制的に妖王退治に参加させられることになった俺達は、

神奈子の案内の元、妖王の城の前まで連れてこられた。

しかし、まあ……

「禍々しいなあ、おい……」

実に城が、禍々しい。

ゲームによくある魔王城そのもの。

見た目としては西洋の城を真っ黒にした感じか。

しかも回りにドラゴンが飛び回っている。

サイズは代々東京タワーくらい。

あれだ、はたらく○王さま!の魔王城を想像してくればいい。

「ん?」

すると、空からなにかが落ちる音が聴こえてきて。

ドスンと、目の前に落ちてきた。

「ハロー雑魚ども☆つとおんやあ?そこにいるのは裏切り者の神奈子ちゃんじゃないか?

何でこんな奴等といえるのかなあ?」

なにこいつウザイ。

超がつくほどウザイ。

しかも脚をコミカルに動かしているため、めっちゃウザイ。

てかなに?この蜘蛛。

デカイ……超でかい。

110メートル程だろうか?大体その位。

そしてワシヤワシヤしてる。

あれだ、100円ショップに売ってる

おもちゃの蜘蛛、それをおつきくした感じ。

しかしウザイ。

「邪魔」

と、面倒なのでデカイハンマー（約五十メートル位）を生成、横に吹っ飛ばす。

蜘蛛は星になった。

隣の奴等が変なやつを見る眼で見てるが、キニシナイ。

「とつとつやりますか」

「む、無理だ！この城は10階層で出来ている！これを攻略するな
ど…。」

今さら神奈子が、止めようとしてくる。
が。

「なーにを勘違いしてるんですかねえ？攻略しないよ？」

「え？」

なんか諏訪子達も驚いてる、なんで？

「俺がやるのは…」

氷でできたデカイハンマーを空中に生成。

しかしサイズは違う。

さっきのが五十メートル程だったのにたいして、

今度は約五百メートル程。

そう、俺がやるのは…

「ダンジョンを、壊すんだよー!!」

そう、大声で叫びながら、城に向けて降り下ろした!!



ーまるで天が落ちてきたかのような、そんな轟音が響く。

そして、俺たちは…

「な、なんてことをしてくれたい?!」

「ツクヨミから、聞いてましたが、これ程とは…。」

「あわわわわわわわ」

――逃げていた。

ナニからかって？それは城の残骸からさ。
あたりや前だ、あんなのをぶち壊したら、瓦礫で溢れるに決まっ
ている。

そして俺達は門の前にいた。

結果、こうして走る羽目になったのである。



「はあ…… はあ……」

「も、もう大丈夫だよね……？」

「っ、疲れました……」

「もう無理、限界……」

あれから三十分後、疲れきっていた。

それやあんだだけ全力疾走したんだ、倒れるに決まっている。

そこに。

「よくもやってくれたな、貴様ラ……」

――怒り顔の、黒い服を着た男が現れた。

第五話 『かつての敵』

「よくもやってくれたな、貴様ラ……」

「――怒り顔の、黒い服を着た男が現れた。さて、どうするか。」

「こいつが噂の妖王なのだろうか？」

「見た目は……黒い。」

「これでもかかってくらい黒い。」

「黒い服に黒いズボン、そして黒いコート。」

「そして黒い目に黒い髪。」

「真っ黒くろすけだな。」

「フオル！黒森！こいつらを殺せ！！」

「妖王は仲間を呼んだ！」

「つと、ふざけてる場合じゃない、奇襲に備えなければ――」

「――は？」

「嘘だろおい、何で生きてるの？」

「久し振りだなあ……氷霧！！」

「――人妖大戦の時に戦った骸骨が現れた。」

「なんで……お前が……」

「――あり得ない。」

「こいつは俺が殺した筈だ。」

「死体も砕いた筈。」

「なのになんで生きている？」

「いや、考えてる暇はねえ、とりあえず剣を……！」

「――ドーン、と重いものが落ちた音がした。」

「――こいつも知っている。」

「あの時……軍の卒業試験の時に現れた鬼だ。」

「あの時と同じ、黒い着物を着ている。」

「しかしなぜいる？綿月隊長に殺されたはず。」

「いや、生きていたとしても数億年経ってるんだぞ？」

ああ、もうわからん、とりあ：
ー腹を強く殴られた、気がした。

◆
「氷霧！」

最初に反応したのは、諏訪子だった。

妖王が氷霧を殴り飛ばしたのだ。

その瞬間、諏訪子達にむかって妖力の玉が打ち出された。

が、諏訪子は地面を操作し壁を生成し、神奈子と天照は神力を使い防ぐ。

「とつとと終わらせてもらおうぞ…」

「…」

もちろんこれをしたのはフォルと黒森だ。

しかし何故か黒森は暗い顔をしている。

「とつとと貴様ヲを殺し、氷霧を殺させてもらおうぞ！」

「つ神奈子さん！諏訪子さん！こいつらは任せました！わたつ?!」

「私は氷霧さんに加勢しにいきます」そう言う前に、何者かが天照を蹴り飛ばした。

「天照ちゃんの相手はこの僕と★」

「この俺だ…」

ー現れたのは数億年前、氷霧とゲームをしていた男と。

青い服を着た男の二人組だ。

「さあて、死にたくないからガンバリマスヨ☆」

ー絶望的な戦いが、始まった。

◆
「が、ハァー！」

口から血が出た。

意識が飛ばなかっただけ、ましか。

クソ、なんだよあのスピード、馬鹿げている。

あんなんチートだろチート。

あれか？あいつの能力は『高速で動く程度の能力』とか、そんな感じか？

「ふん…この程度か…」

すると、妖王がゆっくりとした足取りで、こっちに来た。

「なめるなあ?!アイシクル・ワールド氷結されし世界」

あの時と同じく、高速で動くなら避けられない攻撃をすればいいというもの。

が

『それ』の対策はしている」

妖王の回りに炎が現れ、氷を溶かした。

…いや、可笑しいだろ?!

あれ靈力をこれでもかかってくらい込めて発動したんだぞ?!

しかも範囲100キロというやつだぞ?!何ですべての氷を溶かしているんだ?!

「クソガ!」

「さあ、始めようか、憎き相手氷霧」

第六話 『フオル』

「とつとと死んでもらうぞ…」

「くっ…」

諏訪子は今、危機に陥っていた。

「はあー！」

地面をどごその錬金漫画の様に操作し、フオルにぶつけようとする。

が、消える。

消えたと思ったら、消えた筈の物が空から落ちてくる。

難なく交わすことはできるが、問題はそこじゃない。

攻撃を無効化されているという点だ。

彼女、諏訪子の戦闘スタイルは地面を操作し、相手にぶつけることだ。

しかし、全て無効化されている。

ならば、と思い鉄の輪、なにげにフラフープ程のサイズの物をフオルに投げつける。

が、これも消える。

そして諏訪子の後ろから鉄の輪がきており、斬ろうとしてくる。

が、普通にキャッチ。

… 何処までも、相性が悪かった。

現状、こうなると打てる手はない。

いや、まだあった。

「行け！ミシヤグジ様！」

諏訪子は白い蛇を呼び出す。

生誕、農作、軍事、様々な事柄の崇り神である『ミシヤグジ様』である。

が、

「ふん、リアリティスラッシュ＜現断＞」

しかし、フオルの見えない刃によりミシヤグジは首を斬られ、消え

てしまう。

「…… 本当に何処までも、何処までも相性が悪かった。」

「…… その程度か？ 守谷 諏訪子よ」

しかしフォルは、諏訪子の強さに拍子抜けしていた。

諏訪子は原作でも二人（？）しかいない『神』だ、故にこそ、強いと思っていた。

が、フォルにしてみればただの雑魚であった。

「本当に、弱マキシマイズマジックドラゴンライトニングいなく魔法最強化龍雷」

フォルは骨の指先から龍の様な雷を放つ。

が、

「御柱ー！」

しかし、神奈子が御柱を諏訪子の前に出現させ、それを防ぐ。

「諏訪子！ あっちは任せた！」

「え!？」

神奈子は諏訪子の返事を聞かず、そのままフォルと戦いに入ってしまった。

「え、えーと……」

「…… 始めるぞ……」

「嘘お?!」

今度は黒森が一気に諏訪子に殴りかかってくる。

しかし諏訪子は空に飛び、避ける。

そしてそのまま鉄の輪を投げる。

しかし、殴られ、鉄の輪は壊される。

(あれ? これなら……)

諏訪子はこれに、勝機を見出だした。

さつきまで勝機が無かったのは、単にタネがわからなかったのだ。

あれが能力なり術なり解れば、やりようならある。

しかしそれがなかった。

しかし今度は、今度はわかる。

あの黒森は、単に妖力を使い、身体能力を底上げし、殴り壊しただけだ。

何故か超がつくほど強化されてるが…

(これなら… やれる!!)

ー第二ラウンド、開始。

第七話 『黒森』

「どうした？こないのか？」

「……………」

「ーこれだ。」

さつきから黒森は無言だった。

なにも喋らず、なにもしない。

何故か絶望したような、なにかやってはいけないことをした子供の
ような、

そんな顔をしている。

「こないなら……こちらからいくぞ!!」

「ッ」

だが、神奈子は違った。

彼女は好きに妖王に従っていた訳じゃない。

妖王の意思で発動する呪いをかけられていたのだ。

しかし、呪いは解かれた。

……まあ、妖王は「それを解こうとしたら、殺す」とも言っていた
のだが。

しかし何故か、何処かスッキリしたような顔をしている。

(もうどーにでもなーれ！アハハハハハハハハハハハハハハハ)

「ー人はそれを、「吹っ切れた」と言う。」

「御柱！」

神奈子お得意の御柱だ。

見た目はただの木でできた柱。

だがただの柱と侮ることなかれ、神の力、神力が込められた柱だ。

「ハァー！」

「ーしかし殴り壊された。」

そのまま、飛んでくる御柱を殴り、壊したのだ。

妖怪が。

「なっ…!」

これには神奈子も驚く。

御柱は、そこらの大妖怪程度なら容易く殺すことができる。
それを殴り壊したのだ。

そしてそのまま、無言で殴りかかってくる黒森。

(距離はまだある… なら!)

「天候操作!」

天候操作。

諏訪子の能力と対になっている能力。

それを使い、神奈子は台風を造り出す。

そしてそのまま黒森に向ける。

しかし、黒森はそれを無視して来た。

「なっ?!」

台風のは向かってくるなど、正気の沙汰ではない。
が

「オラア!!」

「ガッ!」

ノーノーダメージ。

そのまま神奈子は殴られ、吹っ飛ばされる。

ならば、と今度は雷を落とす。

が、またもノーダメージ。

吹雪を起こす、無視して殴られた。

暴風を起こす、なにもないかのように殴られた。

神力を使った術を使う、ダメージなし。

絶望。

不意に神奈子の頭に、そんな言葉が浮かんだ。

(いや… まだだ!)

神奈子はふと、思い付いた。

変わればいい、と

黒森との相性は悪い。

なら、フオルと変わればいい、と。

「御柱！」

黒森ではなく、フォルに向けて御柱を放つ。

丁度フォルが諏訪子に向けて雷撃を放ったところであり、助ける形になつたが。

「諏訪子！あつちは任せた！」

「え!？」

諏訪子の返事を聞かず、そのまま御柱でフォルを吹き飛ばす。

咄嗟の事だったのか、防御出来ずに受けてしまう。

そして神奈子はフォルを吹き飛ばした方へ飛ぶ。

そこには身体中にヒビが入ったフォルが居た。

「なめ…るなあ!!」

妖力を解放する。

妖力の波動で吹き飛ばされそうになるが、なんとか耐える。

「ぶち殺してくれる!!」

――第二ラウンド、開始。

第八話 『洩谷 諏訪子』

諏訪子は地面を操作し、黒森に当てる。

しかし、殴られ、防御？される。

(正面からは無理……なら)

先程と同じように、地面を操作し、ぶつける。
が、殴られる。

しかし、黒森は上に吹き飛ばされた。

原理は簡単、単に最初はフェイントであり、黒森の真下の地面を操作し、ぶつけたのだ。

「チツ……」

黒森は右手に妖力を集める。

そしてそれを地面に着くと同時に放つ。

「地殻変動」

地面が砕け、崩壊する。

足場は無くなったが、空を飛べる黒森には関係ない。

それは諏訪子も、同じだった。

(やられたー)

対して諏訪子は、この状況は不味いと思っていた。

彼女の能力は、地面に触れていないと発動できないのだ。

……まあ、彼女がそう思っているだけで、実際は溶岩を作れたりするが。

地面に戻ろうとも、凸凹しており、非常に足場は悪い。
能力を使って直そうとしても、黒森に殺られるだろう。

「ミシヤグジ様！」

祟り神であるミシヤグジの姿は、デカイ白蛇だ。

口から瘴気を放とうとするミシヤグジ、だが、放つ前に黒森に近づかれ、殴り飛ばされる。

今度は鉄の輪を放つ。

変則的な動きをする鉄の輪。

しかし黒森はあえて受け、鉄の輪を砕いた。
もはや打てるてはない。

地面は操作できない、ミシヤグジは殴り飛ばされた、鉄の輪はあれ
で最後。

詰みだ。

彼女、洩谷諏訪子は戦闘経験はない。

これでもかかってくらいない。

戦闘のせの字すら知らないのだ。

結果、彼女が負けても、仕方がないことだったのだろう。

「…… おわりだ……」

諏訪子の頭めがけて、拳が振り落とされたー

◆ 「…… あれ？」

そんな

間抜けな声が、蘇ってから第一声だった。

(なんで…… 私は死んだはず……)

ー彼女には知らないが、この世界の日本の神々は、一定以上の傷^{damage}
を負うと、

強制的に自信の社に戻る仕組みである。

所詮、リスポーンというやつだ。

勿論デメリットはある。

神力の量が約10%低下。

これは時間経過で治る物ではない。

彼女の神力の量を100とするならば、今後ずっと90であると言
うことだ。

勿論直す方法はあるが。

それはともかく
閑話休題

彼女は死んだことが無いので、知らなかっただけである。

だが、これは、本来の、東方Projectこの世界にはない法則^{システム}である。

「あれ……暗いな？」

時刻はまだ夕刻、此処まで暗い筈はない。

そんな疑問を持ち、外にでる諏訪子。

そして外は、闇だった。

「なに……これ……」

比喻では無い。

物理的に闇と化していた。

何を言ってるんだと言われそうだが、実際闇と化しているから仕方がない。

まず空。

闇だ、星ひとつ無い。

太陽の光も、月の光も、星の光も無い。

そして地面。

闇……というよりは漆黒という方が良いだろう。

いや、漆黒という言葉すら生ぬるい。

闇が現実と化した、それが正しいだろう。

そして全てが、闇と化していた。

家々や、木、畑等々。

神聖な場所である筈の社ですら、闇と化していた。

全てが黒い。

更に驚くのは、さつきから聞こえる轟音だ。

ダイナマイトを一万個爆発してもならないであろう音が、さつきからずつと鳴り響いている。

「行かなきゃー！」

謎の使命感に狩られた諏訪子は、先程までいた場所に向け、飛んで行くのだった。

第九話 『神奈子』

「ぶち殺してくれる!!」

フオルが叫ぶ。

先程与えた筈の傷は、全てなくなっていた。

「御柱!」

そんなことは関係ないとばかりに、神奈子は御柱を放つ。

フオルに当たると瞬間、フオルが消えた。

と思っただら、蹴り飛ばされていた。

ズガガガ、と地面を抉りながら着地する神奈子。

普通に着地するフオル。

「風雷神!」

神奈子は能力を使い、台風を生み出す、

しかも出し惜しみ無しの超巨大なやつを。

そしてそれをフオルに向け、放つ。

「ちっ」

舌打ちをしながらも、フオルは能力を使い、別の場所へ転移する。

しかしそこには

「はあ!」

「ガッ!」

神奈子が居た。

そのまま避けられずに、そのままフオルは蹴り飛ばされる。

ズガガガ、と地面をえぐりながら着地するフオル。

それにたいし、普通に着地する神奈子。

「ナメるなあ!!」

フオルが手を前につきだし、妖力をためー

「消えてなくなれ!妖砲!!」

ー放った。

極限まで貯めた妖力の砲撃。

所詮、レーザーというもの。

サイズは一人覆い尽くしても余りあるほど。

それが神奈子に向けて放たれた。

「なっ！」

防御する暇もなく、レーザーに当たる神奈子。

そのままなにかできる訳もなく、死んでしまった。

まあ、今頃社で復活リスボーンしているだろうが。

「ようやく、やつを殺せ」

バキ。

なにかが碎ける音が、平原に響いた。

「噛ませ犬お疲れさん、そしてさようなら」

ローフォルが最後に見たのは、赤い服を着た男だった。



「おー派手にやってるねえ」

そして男ローゼロ・グレイルは闇と化した世界でそう呟いた。

「流石にすこーし早かったかな？まあいいや」

「流石にこれはやりすぎではないか？」

虚空から老人が現れる。

「でえじようぶだ、後でなんとかする」

「それならば、いいのだがな……」

「なーに神威ちゃん？そんなに心配？」

「いや、心配はしてないが、この世界の住人に迷惑をかけてはないか、とな」

「大丈夫大丈夫、そこまでこの世界から外れてないから、大丈夫だよ」

「ふん……」

（そんなに嫌なのかねえ、この世界に迷惑かけんの？）

「む、終わったようだな」

「おー遅かったな、まーたあいつ遊びやがったな？」

闇と化していた世界が、光を取り戻していく。

まるでなにもなかったのかのように。

「後で叱らないとなあ」

と、そんな呑気なことを言っていた時。

ゴゴゴゴゴ、とまるで星そのものが揺れているかのような、そんな振動がしはじめた。

「あらら、予想より早いねえ。ま、いいか、行くよ神威ちゃん」

「ちゃん付けはやめろと言っているだろ」

やはり呑気なことを言いながら、消えた。

まるで最初から、なにも居なかったかのように。

その者達が存在したことを証明するものすらも、消えた。

第十話 『天照大神』

「やはり… 貴方達でしたか…」

ミルザム達が天照を蹴り飛ばした方へ飛んでいくと、既に天照が、
万全の状態で

待ち構えていた。

「あらら、気づいちやっただかな☆」

「ええ、予想はしていましたから」

天照は最初から、気づいていたのだ。

ミルザムがこのことに一枚噛んでると。

あり得ないからだ。

妖怪というのは、基本同種でしか群れない。

いくら強い奴がいても、同種以外には反抗てきだ。

故にこそ天照はミルザムが関与していると思っただのだ。

人知をこえた力を持つミルザムならば、と。

「んーあっているしあつてないね★」

「え?」

「まーそういうのはどうでもいいとして、クロノスちゃん、頼んだ☆」

「ふん…」

後ろにいた男ークロノスに指示をだす。

青空色の目に髪をしている。

180以上はありそうな身長。

そしてイケメン。

そしてなにより驚くのはその男が神の力ー

ー神力を放っていたからだ。

「なっ?!」

神が、何故!

そう叫びたいのを必死に抑える天照。

そしてクロノスは何処からか刀を取りだし、天照に斬りかかる。

咄嗟に天照も剣を作りだし、防御する。

「ぬんー!」

「はっ！」

何合も、何合も切り会う。

常人では、いや、たとえ高位の力を持っている存在でも視認出来ぬ速度で二人は切り会う。

「んーと、これでいいかな☆」

そんな中、ミルザムは手頃な岩を破壊する。

クリエイト・ストーン・ゴレム
「創造・石人形」

能力を発動し、砕けた石の欠片一つ一つが、物理法則や質量保存の法則等を見殺し、

巨大な人形となる。

その一体が、天照に向かって、殴りかかった。

「ッ」

とつさに剣を作り、防ぐ。

「ーそれがいけなかった。」

「ハアッ！」

「ガッ」

心臓を貫かれた。

防御しち瞬間、クロノスが刺したのだ。

たとえ神でも死ぬ^{リスボーン}のは確実な、致命的な一撃だが。

「油断…：…しましたね…：…」

「なっ?!」

しかし、彼女はこれでも最高位神。

心臓を貫かれたぐらいでは、死なないのだ。

腕を掴む。

心臓が貫かれていると言うのに、もの凄い握力で掴まれる。

「燃えろー！」

「ガアアアア!!」

「ー燃えた。」

刀を離し、ゴロゴロと転げ回るクロノス。

彼女は天照大神。

太陽を司る神。

故に、燃やすのは動作も無いこと。

「あらら、想定外★」

何処からかミルザムが宝石を取り出す。

それを捧げると、クロノスが青いドーム状の光に包まれた。

「何を..」

「俺の役目はここまで☆元々君の足止めしか頼まれてないからね★

じゃ、バイバイ☆」

するとミルザムとクロノスは、ボンツと、消えた。

まるで最初から誰も居なかつたかのように。

消えると同時に、闇に包まれた。

「なっ?!」

全てが闇に変わった。

暗黒という言葉すら生ぬるい闇に。

「これは... いったい...」

——天照の疑問に答えられる者は、いなかった。

第十一話 『妖怪の王と氷を司る男』

ちっ…どうする？

見たところこいつの能力は移動速度特化型。

しかも俺の氷を溶かせる程の火力持ち。

なんだこのチート野郎。

ふざけてるのか？

いや、あのスピードは妖力で強化しただけか？

にしても可笑しすぎるだろ。

「考えてる暇はないぞ？」

「チッ！」

なにかわからんレーザーぽいっものー多分妖力でできたー
を連写してきた。

空を飛び、避ける。

避ける避ける避ける。

しかし、これだけの妖術使えば、妖力も減るはず。

しかしそんなのは知らないとバンバン打ってくる。

あれか？こいつの能力妖力無限とかですかこのヤロー

「ほう…いい線いってるな」

「はっ」

ドゴン、と被弾し、吹き飛ばされる。

空中で体制を直す。

いや、そんなのはどうでもいい、なぜわかった？

心を読む能力？もしくは読心術か？

どつちにしろ面倒な…

「ふむ…この程度か」

「あ？」

「ミルザムの奴から警戒しろと言われていたが…拍子抜けだ」

ミルザム？確か……そうだ、俺がまだ都市にいた頃、

そんな奴と友達…じゃないな、よくわからん。

なにせ数億年も前の話、覚えている方がおかしい。

いや、そうじゃない。

なぜこいつが知ってる？

ああくそ、マジわからん。

巨大な氷の剣を作り、切りかかる。

が、片手で受け止められ、砕かれた。

いや、握力凄いなおい。

今度は片手で持てるサイズの剣を作る。

そしてそのまま霊歩で近づき、斬りかかる。

すると妖力で作られたであろう刀を何処からかだし、受け止めた。

こいつ刀使えるのかよ！

霊力を剣に纏わせる。

「む？」

気づいたようだが、もう遅い！

「霊斬ー！」

青白い光が、妖王を切った。

それはもう、縦に真つ二つだ。

超至近距離からの霊斬。

防げる訳がない。

死体が地面に落ちる。

イヤー勝ててよ…かつ…た…

…：…なんかもぞもぞと動きだした。

え？まだ生きてるのこいつ？

ピカツと、光った。

いったいメガー！

めっちゃまぶしいんですけど?!

光が収まる。

そこに居たのは、傷一つない妖王だった。

いやふぎけんなよ。

なに蘇ってるの君？

普通に死ねよこのヤロー

「顕現『がしやどくろ』」

地面から巨大な骨の手が現れ、俺を叩き落とそうとしてくる。
いや今さらこの程度の攻撃で…ねえ。

面倒なので氷らせ、霊力の玉をぶつける。

ガラスが砕けたような音と共に、砕けちった。

さて、どうしようか。

死んでも蘇るのなら現状、どうしようもない。

いや、恐らくだが『死体から蘇る程度の能力』か？それなら納得で
る。

しかし…：面倒だが、これが確実か。

「なにを…」

「霊力を感じた妖王だか、もう遅い。」

「^{アイス・タイム}氷った時間」

時間が氷ったー

第十二話『死』

時間停止。

それは、能力バトル物の作品によくでる、チート能力である。どこぞの吸血鬼の様に数秒しか停められなかったり。

あるいは、幾らでも止められたりする。

チートといえばこれ、と言われる位には有名なやつである。

実際、この東方 project にも時止める奴がいるくらいには。

そして、何が言いたいのかというところ、時間を止めたということである。

俺の『氷を司り 氷らせる程度の能力』で。

無論デメリットはある。

バカみたいな霊力を使うため、数秒しか止められないのだ。

あと、霊力の使用量が多いため、これを使ったあとは能力も、霊術も使えなくなる。

関係ないが、世界が灰色になったりする。

と、中々に使いにくい。

が、これしかないのだ。

いや、あいつの速度と身体能力、無限妖力（仮）を考えればこれくらいしか打つ手がないのだ。

さて、じゃあ始めますか。

一気に妖王まで近づき、殴る。

殴る。

殴る殴る殴る殴る殴る！

拳打、裏拳、膝蹴り、肘打ち、蹴り上げて踵落とし。

回り蹴りにダブルハンマースレッジ。

更に殴る殴る殴る！！

結果、傷やらアザやら腫れやら、原形がわからなくなった。けど殴る。

殴るのを一回やめ、離れる。

そして氷らせ、靈力の玉をぶつけ、完全に粉々にする。
と、同時に灰色だった世界が色を取り戻す。

時間停止が切れたのだ。

更に膝をつく。

これだ。

先程言ったとおり、時間停止は靈力をバカみたいな量使うため、
足っていられなくなるのである。

急激な脱力感に襲われ、立つこともままならない。

まあ、後で諏訪子達がここにくるだろうから、大丈夫だとは思うが。
ドスン、となにかが落ちる音が聞こえた。

嫌な予感がしながらも、見る。

そこには――無傷の妖王がいた。

「な……ぜ……」

あり得ない。

姿態を完全に破壊したはず。

蘇る能力はカズキが持っているから、蘇ったのもあり得ない。
なぜ？

ありえない。

そんな思考で埋め尽くされる。

「貴様は邪魔だ、死ね」

あ、これ死んだ――

――死んでもらったら、困るんだヨナア？

最後に、そんな声が聞こえた、気がした。



「……………何者だ」

そう、死体の氷霧に、問い掛ける。

先程妖王は氷霧の頭を砕き、殺した。

しかし、妖王はなにかがいると、謎の確信があった。

『何者ダア……？』

死んだ筈の氷霧が、動いた。

グチャグチャと、気持ち悪い音をたてながら。

まるで壊れた人形を、無理矢理動かしているかのような、ぎこちな
い動きで立ちながら。

『そうだなア……耳の穴かッぽじつテよくキケエー！』

まるで頭に直接声をいれているような、気持ち悪い声で言う。

そして、ぐちゃぐちゃと、嫌悪感しか感じない音をたてながら。頭
が再生されていく。

『俺ハ六神魔将が一人！デスペア様ダアア!!』

ー絶望の始まりダア

第十三話 『絶望』

瞬間、闇に染まる。

空も、海も、陸も、星も、何もかもが闇に染まる。

『ホイじゃあ…イキマスカー?!』

ドン、とあり得ないスピードで氷霧ーいや、デスペアが走る。

妖王も極限まで身体能力を妖力で強化し、迎えうとうとする。

ー気づいたら、右手が無くなっていた。

肩のあたりから、えぐりとられている。

「なっ?!」

噴水のように、血が吹き出る。

驚愕の声をあげるも、冷製に右手を再生させる。

『なんだ、てめえ、再生能力…いや、超速再生力?面倒な』

筋肉がむき出しになった顔で、デスペアが言う。

「ー」

妖力でできたレーザーを放つ。

着弾、そして爆発。

更に放つ。

何十、何百、何千と放つ。

デスペアは一切、避けることなく、受けた

妖王は一度放つのをやめる。

煙が晴れた時そこにいたのは、無傷のデスペアだった。

「な……ぜ……」

『ハっ雑魚の攻撃なんか、効かネえよ』

デスペアが一瞬で妖王に近づく。

そして腹パン。

とてつもない激痛とともに妖王が吹き飛ばされる。

空中で体制を立て直そうとするが、その前にデスペアに頭を捕ま

れ、地面に向けて投げられる。

周囲に岩をハンマーで殴ったような轟音が響く。

更に地面が津波の様に唸り、クレーターを生み出した。

「カハッ」

肺の空気が一気に消え、呼吸不全に陥る。

焦りの表情を浮かべるも、まだ余裕があると自分に言い聞かせる。

吸血鬼の再生能力を発動する。

発動しない。

何度やっても、できない。

「なっ…ぜ…」

困惑の声をあげたところに、デスペアがすぐ近くに着地した。

『ほーウ、『妖を司り 操り 支配する程度の能力』か、中々にいいの持ッてルじゃねえカ』

なぜ知っている。

それは誰にも言っていない、物に書き記した覚えもない。

なぜ、なぜなぜなぜなぜー

『ヤっぱ便利だナー『鑑定の宝石』フオートレスかう貰っトイテ正解だッたナ』

何を言っているか、わからない。

いや、理解したくない。

『ふむフム、効果は妖力無限ニ全妖怪の能力使用可、更に支配？脇役の癖にいいの持ッてンナー』

『ま、才前は頑張ッた方だよ、じゃアな』

ーそれが妖怪の王、アーロゲントが聞いた、最後の声だった。



『…ちっ限界か』

そう、デスペアは一人呟く。

(影の^{shadow world}世界を発動したのが不味かったか…)

ー轟音が響く。

ダイナマイトを一万個爆発してもならないであろう音が、さっきからずっと鳴り響いている。

影の世界が、壊れ始めている。

『もウ目覚めタか』

瞬間――影の世界が壊れる。

まるで影と化していたのが嘘のように、光を取り戻していく。

そしてデスペアも、元に――氷霧 零に戻った。

――全てが、終わった。

第十四話 『戦いの終わり』

「知らない天井だ」

と、お約束の台詞をはく。

いや、よく見たら諏訪神社の天井だ。

はて、いったい何がないあったのだろうか？

…いや、思い出した。

確か妖王に殺されたのだ。

いやまて、ならなぜ生きている？

殺された。

そう、俺は頭を砕かれて死んだはず。

なのになぜ？

ガラツと、襖が開いた。

そこに居たのは、諏訪子だ。

ぶわ。

と、泣き出す諏訪子。

「うえええええええん！」

「グボアツ！」

泣きながら抱き付かれて、蛙の呻き声のような声をだしてしまう。

「ちよ一回離れ：ゲツ?!鼻水ついてやがる?!」

「うえええええええん！」

「やめてええええ!!」

◆
一時間後、俺は囲炉裏がある、少し広い部屋で諏訪子達と介錯していた。

「んで、最初に抱き付いてきたのはなに？お陰様で服変える羽目になったんですけど」

「まあ、それは仕方がないだろう、なにせ死んでいたのだから」

俺の質問に、神奈子が答える

「……………はっ…」

white?なに言ってるかわカラナイヨ。

いや、わかると言えればわかるが、死んでいるのならば俺は生きて
いる??

そろそろ哲学の域にいきそうだから思考を止めよう、うん。

「…諏訪子がお前を見つけた時、心臓が止まってたんだ

そして葬式をしようとしたとき、棺桶を蹴り破り、動きだした

…と思ったら動きが止まり、確認すれば心臓が動いていたため、こ
うして寝かせていた、

という訳だ」

「うん成る程わからん」

「安心しろ、私もわからん」

「でーー起きた?ばっかの氷霧には申し訳ないんだけど……」

諏訪子が、申し訳なきような顔で言ってくる。

「これからー宴会があるんだ」



「えん…かい?」

あれか?上司から酒を無理矢理飲まされ、泥酔したあとアー♂なこ
とを

やらされ、最終的に上司がブタ箱でアー♂しまくるイベントのこと
か?

「…少なくともお前が考えているようなことは起きないからな?」

心を読まれたでござる。

あり?そーいえば。

「神奈子、なんか変わった?」

そう、なんと言うか…

雰囲気が変わったとような感じがする。

「ああ、あの時はその、私も色々、切羽詰まっていたと言うかなんと言
うか……」

「ふーん」

「聞いてきたのはそっちなのになんだその返事は……」

「で、参加するの？しないの？」

諏訪子がもう一度聞いてくる。

というか。

「死んだ人間に参加させるって、おかしくね」

自分で言うのもなんだが、俺はつい先程まで死んでいたのである。
なのに参加しろとは。

解せぬ。

「…神にとって人間は『どうでもいい』存在だからね」

あ、どうでもいいのに参加するか聞くの？という質問はNGで。

「なにそれ怖い」

「で、参加するのか？しないのか？」

神奈子がイライラした声色で聞いてくる。

んなもん

「参加するに決まってるだろお?!」

第十五話 『宴会』

「…酒臭え…」

第一声がそれかよ、と突っ込みが入りそうだが、言わずにはいられない。

酒臭い。

超臭い。

多種多様な神々が、飲めや騒げや色々してる。

ああ、俺の中で神の威厳が崩れていく。

てか神々よ、「死んでから蘇った人間が見たい」

とかなんとか言ったら楽しいじゃないか。

なのに見向きもしないとは。

解せぬ。

「久しぶりですね、氷霧君」

どこか、懐かしい声が聞こえ、振り向くと。

ー今は懐かしい、ツクヨミ様がいた。

「…お、お久しぶりです、ツクヨミ様」

「はい、お久しぶりですね」

やべえ、怖い。

顔は笑ってるんだけど目が笑ってねえ。

「一つ聞きたいのですが、なぜ、あの時ロケットに乗らなかつたんですか？」

「いや、あの時はロケットに向かっても時間が足りないかなーと、思ってた次第でして、はい」

「いえ？あそこならなら全力で飛べば間に合ったと思うんですが？」

「いえ、あの、えーと」

ーそれはそれは、見事な土下座をしたそうなの。



「はあ、マツタク、貴方という人は」

「いや、あの、すみませんでした」

あのあと色々問い詰められ、正直にロケットに乗らなかつた理由を話したらあきれられたでござる。

…まあ理由が「色々な所を見て回りたい」だったからかも知れんが。そう、あのあと（※十二話）考え直し。

原作キャラと会いたいと思つたのだ。

…まあ、よくよく考えると別に地上に残らなくてもよかつた気がするが。

「氷霧さん、月に来ませんか?」

「は?」

ホワイ?

いや、意味はわかるのだがどう行けと?
んなもん無理やろ。

「私の能力を使えば月に一瞬で行けます

それに永琳やカズキさん達もあなたのこと、心配していましたよ」

「――」

…アイツら、俺のこと心配しているのかよ。

けど、俺は

「行きません」

「……何故ですか?」

月は地上よりも良いところですよ

妖怪は存在しない、科学技術も上、娯楽もある

まさに『楽園』です」

「いえ、俺は…」

一瞬、言葉がつまる。

けど、言わなければならぬ。

「俺は、旅がしたいんです」

「…旅、ですか」

俺がこの世界に来る前から、思っていたことをはきだす。

「ええ、俺はこの世界を、見て回りたい

行く先々で人々と触れ合いたい

強敵との闘争

未知の冒険

俺はそんなー」

「ー心踊る冒険が、したいんです」

「ふふ、そうですね、なら仕方ないですね

ああ、永琳達には元気にやっていると、伝えときましょう」

「…ありがとうございます」

「…ああ、それと」

「？」

はて、なんかまだあっただろうか。

『ゼロ・グレイル』という人と、会ったこと、ありますか？」

「いえ？誰ですかそれ」

「…そうですね、それでは」

ツクヨミ様は、今度こそ離れ、他の神と談笑しながら何処かに行つた。

「なんだつたんだ？」

ゼロ・グレイルねえ…聞いたことがあつたような無いような。

ーそうして、ナンヤカンヤ色々あつて宴会は終わったとき。

……てか宴会なのにツクヨミ様と会話しかしてねえ

神々よ、俺に興味を持ったと言う話は嘘だったのか？

まあいいか。

第十六話『旅』

「――旅？」

「こそ、旅」

――あれから、約二十年の時が経った。

原作どうり神奈子がうちの神諏訪神社になったことを除けば、ホントになにもなかった。

因みに神奈子がうちの神になったのは諏訪神社に迷惑をかけたかららしい。

あと月の連中は俺が生きているのを知り大層喜んでいたらしい。

「何で？」

諏訪子が心底わからないといった顔で聞いてくる。

「いや、そろそろゴロゴロしてるのも飽きたな、と」

「そうか」

神奈子の返事が冷たい。

「いつ行くの？」

「明日」

「気お付けてね」



……と、こんなそんなで旅に出た俺氏であったとき。

いや、本当になにもなかったのよ。

サプライズパーティーとかもつとシリアスなお別れの台詞とかあってもいいのに。

さて、今回の旅の目的地は前回同様決まっている。

行き先はズバリ、西洋！

理由は何となく。

…それは流石に嘘だが。

本当の理由は原作キャラである『レミリア・スカーレット』『フラン
ドール・スカーレット』

に会うためだ。

この世界ではどうなってるか気になったのだ。

あと原作屈指のロリキャラに会いたくなかったのだ。

……ロリコンじゃないからね。

……さて、俺のロリコン疑惑はさておき。

一番の問題は行き方だ。

行くなれば船なりボートなり必要だ。

が、そもそも船に乗れるのか。

根本的に船はあるのか？

等々：

問題点は色々ある。

が、問題ない。

色々と寄り道しながら旅をするので、道中でどうにかなるだろう。

楽観的だが大丈夫だ、問題ない。

さて、俺の：

「旅の、再開だ」

◆
その後の諏訪神社にて。

「行っちゃたね」

「…そうだな」

「御別れの言葉とか、よかったの？」

「…辛気臭いのは、嫌だから」

「えー別に一生のお別れって訳じゃないんだからもつと気楽に」

「一生の別れだろう？」

「え？」

心底わからなさそうな顔をしている諏訪子に、神奈子が語る。

「あいつは人間、私達は神」

私達に寿命という概念はないが、あいつにはある」

「いや今さらなに言ってるの?」

「え?」

諏訪子がアホの子を見るような目で問い掛ける。

「二十年、二十年だよ?」

二十年も一緒にくらしらしてて姿が変わってないんだよ?

普通に考えて不老とかそういう能力とか持ってると思わない?」

「――」

たっぷり二十分程だろうか。

それほどの間、黙りきった二人。

最初に口を開いたのは、神奈子であった。

「ふふ、そうか、私はバカだったんだな…」

「今さらなにいつてるの?」

「ぐは!!」

吐血、いや実際にはしてないだろうがそんな血が出そうな台詞と共に膝を着く神奈子。

――そんな平和な守谷神社に、一人の赤い服を着た男が立ち入った。

「やあ!」

始めまして、洩矢諏訪子に八坂神奈子」

「ツ?!」

その声を聞き、瞬時に戦闘準備に入る二人。

『勘』が二人に告げる。

――この男は即座に殺すべきだと。

即座に二人は能力を発動する。

諏訪子は地面操作で槍の様なものを男の地面から生み出し、ぶつけようとする。

神奈子は天を操作し、雷をぶつけようとする。

――が、発動しようとした瞬間、力が抜ける。

「なっ…に…」

「力が…抜け…」

立つこともままならなくなり、地面につく二人の神。

「ひどいなーまだなにもしてないじゃないか」

けらけらと、嫌にムカつく笑みを浮かべる男が、急に真面目な、深刻な顔をする。

「じゃあね、お二人さん」

こうしてー

二人の神は、この世界から消えたのであった。

閑章

閑話『喚ばれし者』

「おおー勇者たちよ！よくぞ我が呼び声に答えてくれた！」

その声に、玉座の間にいるあの学校の生徒たちが騒ぎだす。

彼等は一様に「ここはどこだ」「学校は？」「勇者召喚？」「うほっつい男♂」

等々言い散らす。

混乱しているのがよくわかる。

が、この中で一番混乱しているのは、一人の異物イレギュラーだった。

(アイエエエエエ?!勇者召喚?!勇者召喚ナンデエエエ?!)

ー彼の名は『材木屋 俊典』この世界に居る、数少ない転生者だ。

そして彼は、『東方project』を知っている。

知っているからこそ、転生したのだ。

そして彼を混乱させるもうひとつの要因がー

「ね、ねえ蓮子、これって…」

「ふふ、そうねメリー…」

「異世界キターー！」

ー宇佐見蓮子、そしてマエリベリー・ハーンの存在だ。

(こんな展開原作にナカッタヨネエエエ?!)

そう、こんな展開は原作の『東方project』にはないのだ。

そもそも異世界ものなので異世界から異世界へ行く等訳がわからない。

「ここでは落ち着かないだろうし、食堂の方へ移動しましょうか」

そんな彼の混乱を他所に、大臣らしき人物が、案内を始めた。



場面は変わり、食堂へ移る。

といっても学園とかにあるようなものではなく、ながーい机がある、ながーい部屋だ。

室内には松明等がなく、変わりに怪しい…具体的には混乱に陥りそうな光を放つランタンがある。

そして机の上には日本料理らしき物から西洋料理等々。

雑食にも程があるだろうと言いたくなるレパートリーだ。

「本題から入ろうか…」

国王らしき、なんか髭が生えたおっさんが話す。

「この国は今、化け物たちに襲われている！」

「「…はっ…」」

ー国王が話した内容はこうだ。

この国は今、悪魔に襲われている。

その悪魔の名は不明。

目的も不明。

が、数多の悪魔、魔物を率いて攻めてきている。

幾つかの大国が滅び、人類滅亡の危機に。

せや、勇者召喚しよう↑今ここ。

という訳だ。

聞けば聞くほど「ふぎけるな」と言いたくなる内容だ。

が、しかし

「魔王討伐とか、燃えるじゃねえか！」

「ああ、男のロマンだ！」

「異世界転移に魔王討伐とか、燃えるわね!!」

等々。

殺る気満々である。

因みに上から。

モブA。

モブB。

宇佐見蓮子。

である。

「なにいつてんだこいつら…」

逆に萎える材木屋。

こんな内容で燃えるとか、頭可笑しいんじゃないか。

若干酷いことをぶつぶつ言う。

まあ、こんなこと言われて燃える奴が可笑しいだろうが。

(まあ、いざとなれば能力使うか……)

等と考える材木屋 俊典であったとき。

閑話『???転生』

「○○!!」

そんな俺の叫びを前に、轢かれる○○

「そんな…」

昨日も、今日も、明日も。

ずっと普通の毎日が続くと思っていた。

なのにー何で。

何で死んだんだよ、○○



「ねえ、聞いた？この前の話」

「ええ、聞いたわよ、何でも運転手が居ないトラックに轢かれたとか」

「最近妙にそんな話を聞くわねえ」

「警察が犯罪組織がなにかやってるんじゃないかって、調査してるらしいわよ」

「そりゃ一ヶ月で1000人も誰も乗っていないトラックに轢かれたんだからねえ」

ヒソヒソと、近所の人達がこの前の事故を話している。

最近妙に事故が多くなっている。

しかもその大半がトラックによる事故。

更には運転手も誰も居ないときだ。

こんな話を聞くと、あいつが話していたアニメを思い出す。

そうだ、あの時もあいつと事故の話をしていて「もしかしたら引かれれば転生できるんじゃないか」

って、バカみたいな話をして……

：あいつは俺の、唯一無二の親友だった。
なのになぜ。

そんな暗い事を考えていたからだろうか。

何故かあったバナナの皮を踏み、転んでしまう。

追い討ちをかける様に、赤子が乗っていないベビーカーに轢かれる。

そして、トラック……に轢かれる。

『そんなに彼に会いたいのなら、会わせてあげよう』

最後にそんな声が聞こえた——気がする。



「……………何処だここ」

一人、なにもない空間で呟く。

俺の記憶が正しければ俺は死んだはず。

というか、ここまで白い空間、見たことがない。

いや、まで。

これは、まさか。

「最近の若者は察しがよいのう」

そんな声に、過剰に反応し、振り向く。

「…ダン○ルドア先生？」

「なんじゃ、お主もあやつと同じ反応をするんじゃない」

そこに居たのは、どこぞの魔法学校の校長のような姿をした、老人だった。

「さて、本題から入らせてもらおう、お主には「転生か？」…ホントに察しが良いな、お主」

「うーむ、これは予想外」

と、虚空から、赤い服を着た男が現れる。
もう、驚かない。

こんなに現実実が無いことが起きてるんだ、多少のことでは驚かん。

「さて、なにから話そうかー」

赤い服を着た男が、急に語り始めたー

ー全ての話の聞いたとき、気づいたらゼロと名乗った男の胸ぐらを掴んでいた。

「てメえ!!ふざけんなよ!何でそんな理由で!」

「これこれ、落ち着かんか」

ダン○ルドア擬きがなにか言ってくるが、無視する。

「まー君の言葉こそ最もだと思っただけど、あのジジイ共が」

「そもそもお前が原因だろうが!」

「いや、確かにそうだけでも」

大声で怒鳴り散らすも、まだ怒りは収まらない。

なんで、そんな理由で、あいつが殺されなきゃいけない。

「てメえの尻は自分でふけ！それが大人だろうが！」

「うーむ、見事なまでの正論」

ハアハアと、息をきらす。

あれだけ怒鳴り散らしたんだ、息がきれるのも当たり前か。

「して、どうするんじや？転生するのか？しないのか？」

「するに決まってんだろ！」

「ふむ、では、始めるぞー」

急に視界がぼやけ始め、俺の意識が消えていくー

ー待ってろよ、氷霧。

西洋編

第一話『西洋の地』

旅はいいものだ、と彼、氷霧零は呟く。

自分で好きなところに行き、好きなことをする。

現代^社日本人^畜にとっては夢のようなものだろう。

そんな中、彼は斬りかかってきた現代の高校の制服を着た男の首を氷の剣で撥ね飛ばす。

そこはまさに、地獄。

まるで八寒地獄こどきブリザードが荒れ狂う、終わりの地。

全てが凍りつき、生命が自ら命を立つ世界。

そんな中、彼はこう呟いた。

「どうしてこうなった」と……………

■■■■

時は、彼がこの西洋の地にたどり着いた時まで遡る……

■■■■

「うおー……ここが西洋かー!」

港町で大声をだす青年がいた。

彼の名は『氷霧 零』言うまでもなく、この作品の主人公である。

そしてここは西洋にある町の一つ、『グダンスク』

メタイことを言うならば、実際に存在する港町で、海神とされるブルンス像等がある町だ。

「さーて、言葉が通じないがどうするー? ハツハツハツ」

「Hey, is it he? (おい、あいつなんだ?)」

「Is not it a smuggler? I, m s t r a n g e c l o t h e s (密入国者じゃないか? 変な服着てるし)」

「I, l l c a l l t h e p o l i c e f o r t h e t i m e b e i n g . (とりあえず警察呼ぶわ)」

「I r u n , I g o , a n d , R A . (おう、行つてら)」

彼が変なことを呟いてる間に、周囲の人間は危ない奴と判断したよ
うだ。

そんな、回りが氷霧を変人と認定したとき。

「そこのお兄さん?」

「ん?」

日本語で、一話かけてくる者がいた。

「運が無さそうなお兄さんにこれを売ってあげよう」

「いや、いらんわ」

氷霧に話しかけてきたのは、黒い服に黒いフードに身を包んだ人物
だ。

手には、宝石がついた指輪を持っている。

「これをつけるとあら不思議、この国の言葉がわかるようになります
!」

「なにい?」

フードを着た人物の言葉に、「なに言ってるんだこいつ」という顔を
する氷霧。

初対面の人物に胡散臭いアイテムを売ってやる等と言われれば、当
たり前の反応ではあるが。

「なんと!通常なら100000Gゴールドのところをなんと!10Gに!

どうです、お得でしょう!」

「いや、Gってなんだよ……」

だが、そう悪い話でもない。

彼はこれ売りたい、氷霧は言葉がわかるものが欲しい。

そう、利害は一致している。

もし、これがただのゴミならば、後で殺すなりなんなりすればいい。

「よし、買った…が、通貨を持ってないんでな、これでいいか?」
と、懐から100000Gをだす。

「……いいでしょう、はい、どうぞ」

翻訳の指輪(仮)を早速装備する氷霧。
すると――

「いや見たんだよ！変な格好した男をさ！」

「て言われても、そんな男いないよ？見間違えじゃない？」

「いや見た！シエオゴラス様もそう言ってる！」

「なに言ってるんだこいつ」

どうやら、先程会話していた者は、警察（正確には違うが）を呼んでいたらしい。

しかし重要なのはそこじゃない。

英語が、わかるようになっていた。

どうやら本物の魔道具マジックアイテムらしい。

氷霧は、先程の人物に礼を言おうとし――

「……あれ？」

気づいた時には、その人物は消えていた。

第二話 『吸血鬼と勇者達とオマケ』

ー吸血鬼

それはファンタジー作品では必ずでてると言っても過言ではないだろう。

なかには時を止めたり、運命を操る者さえいる。

そんな、この世界における吸血鬼はー

■■■■

「お嬢様、どういたしますか?」

「どうって言われてもねえ……」

ー悩んでいた。

部屋で優雅に紅茶を飲みながら、悩んでいた。

悩みの元はこの紅魔館に侵入してきた愚かな人間のことだ。

無論、彼女、『レミリア・スカーレット』の力を持つてすれば人間等瞬く間に皆殺しにできる。

が、それは出来ない。

別に侵入してきた人間が強いわけではなく、そのバックにいる奴が問題なのだ。

その後ろ楯バックにいるもの。

それは『ローザンメイデン帝国』

そう、今侵入している人間の背後には国が一つついているのだ。

しかもこの大陸における最大国家。

変に殺すと最悪、吸血鬼VSローザンメイデン帝国という馬鹿げた事態になるかも知れないし、両勢力ともそんなことをしてる暇も余力もない。

結果、どうすべきか悩んでいるのだ。

「悩んでいるようだね、レミリア」

「お父様!」

そんないつそのこと国ごと消してやろうかと考えていた矢先に、彼女の父親にしてこの紅魔館の主『ウラド・スカーレット』が部屋に入っ

てきた。

「あの、ウラド様、女性レディの部屋にノックもせずに入るのはいかがかと…」

「ん？自分の娘なんだからいいだろう？」

「いえ、そういう問題では……」

ノックもせずに入ってきたウラドをこの前レミリアが雇拾った『十六夜咲夜』が注意する。

「まあ、ああいう輩はお父さんに任せなさい」

「はーい！」

あんな奴ら皆殺しにしてくれると言うウラドに、レミリアが元氣よく答える。

皆殺しにしたら問題起こるんじゃないの？

とわ言わずにただ咲夜は沈黙していた。

■■■■

「初めまして、諸君、私はウラド・スカーレット、この紅魔館の主だ」
「ーヒッ」

勝てない、殺される。

それが侵入者ー未来の日本から召喚された勇者達が抱いた、ウラドに対する印象。

駄目だ、勝てない、戦うのが間違ってる。

死ぬ。

膝が震え、歯がガタガタと音をたてる。

手から剣が滑り落ち、戦う意思が削がれていく。

ああ、なぜ来てしまったのだろう。

吸血鬼を倒す等、ただの日本人でしかない自分たちには無理だ。

そんな、絶望が広がった時。

「だーから言ったのに、来たら死ぬって」

明るい声が聞こえた。

■■■■

自称勇者君たちと紅魔館に要したら即全員死にかけてる件について。

もしここにネットがあればこんなスレを建ててやりたい、そんな気分だ。

まず、何故俺ー氷霧零が紅魔館に入るのか、そして勇者なんてなのなのか、それを説明せねばなるまい。

そう、それは適当な町に行つて妖怪ーこつちでは魔物と呼ばれてるらしいーを退治し、町の住人に感謝されていたところ、騎士風の人間、つまりこの国の公務員的な奴に頼まれたのだ。

「吸血鬼を共に退治してくれないか」つて。

詳しく聞くと、それがスカレット家、つまり原作キャラを退治してくれと頼まれたのだ。

無論そんなのイエスとは言わない。

が、勇者とやらがいるらしく、俺が居ても居なくても紅魔館に襲撃をかける予定らしい。

で、なら紅魔館ついた瞬間全員殺せばいいかと考え、参加。

結果、今に至ると言うわけだ。

しかし……これ俺いなくて良かったな。

これ俺居なくても目の前の吸血鬼さん（多分レミアの父）が皆殺しにしてくれただろうし。

これ完全に無駄足じゃないですかーやーだー

「貴様……何者だ？」

と、そんな下らないことを考えてたら吸血鬼さんが話かけてきた。なら、こつちはこう返させてもらおう。

「俺は氷霧零、しがない旅人さ」

第三話 『吸血鬼と勇者達とオマケ その二』

「何者だ？」

「んー？そこらにいる退治屋」

「……まあいい」

吸血鬼が力を溜める。

それに対し、俺は氷の剣を生成、靈力で肉体を強化する。

「死ね」

ガキン、という金属がぶつかったような音が響く。

無論金属がぶつかっている訳ではなく、靈力、及び魔力により超強化された剣と爪がぶつかりあっているだけだ。

一旦吸血鬼から離れ、距離をとる。

そのまま巨大な氷剣を生成、ぶつける。

が、片手で破壊される。

そんなの知るかと思に更に三個生成、靈力で切れ味を上昇させる。

対し、吸血鬼は金色の、趣味が悪そうな鎧を纏っていた。

「なにそれ？」

「人間には到底理解できない技術で作られた鎧だ」

教える気はないのね。

そう心の中で呟きながら、さつき作った剣を飛ばす。

なにやらぶつぶつ言ってるが、気にしない。

当たる直前、まるで最初からなかったかのように氷の剣が消えた。

ヤバくね？

「襲雷」

そう吸血鬼が呟いた瞬間、真上に強力な魔力を検知。

ヤバイと思つた俺は、即座に離れる。

瞬間、轟音。

雷が落ちた音を数十倍程大きくしたような音が響く。

光が収まった時、俺が居た周辺は消滅していた。

え？ヤバくね。

いや消滅ってなんだよ、焦げるとかじゃないのかよ。

しかも天井も消滅してるよ、ヤバイよ。

これは勝てんな。

こいついつぞやの妖怪の王さんと同等……あるいはそれ以上だ。

さて、こんな時は……

「逃げるんだよお、スモーキー！」



「眷属たちよ、追え！」

一目散に逃げたした氷霧に、一瞬拍子を抜かれたが、冷静に眷属を召喚する。

吸血鬼ーウラドの影から這い出るように狼や蝙蝠、更にはゾンビ等が這い出る。

その数、数百。

この広大な紅魔館から逃げられたら、探すのは困難だ。

仮に見つけても、ただリアル鬼ごっこが始まるだけだ。

故に、一対一ではなく、数で見つけ出し、殺す。

無駄に空間を弄り、広くしたのは間違いだったか。

心の中でウラドはぼやく。

これまでの侵入者は入ると同時に興奮するや奴や殺しにくる奴等しかいなく、それらは逃げる前に殺したし、空気を読んで逃げたりはしなかった。

ようは、戦闘中に逃げるといふことはしないのだ。

氷霧がしたのは魔王との戦闘中に背を向けて逃げ出したのと同義、拍子を抜かれても仕方ない。

「やっし…」

追跡は眷属に任せることにしたウラドは、失禁している者たちに目を向ける。

ガシャ、という金属音をたてながら一人の男が立ち上がる。

その男は材木屋 俊典。

勇者たちの中でも異質な存在だ。

「……」

「立つのがやつと、といったところか」

立ちはしたが、なにもしない材木屋にウラドが素晴らしい放つ。

そう、材木屋はたつのがやつとで、なにもできない。

あるいは能力転を使生えば一矢報いることもできたかも知れないが、彼の能力は自分も味方も全て巻き込む。

全員共倒れだ。

そうなつては本末転倒、意味がない。

なにか策はないかー

そうか考えるが、ない。

「消えろ」

なにもできないと判断したウラドが、右手に魔力を溜める。

『やあやあやああーそれは待ってもらおうか！』

突如、虚空かり声が聞こえる。

目を開き驚く材木屋にたいし、ウラドはまるでわかっていたかのような反応を返す。

「この声…ミルザム、貴様か」

『正解正解大正解！』

異空から青い髪をした青年が現れる。

そう、毎度お馴染みミルザムだ。

「とつとと消えろ」

「はいはい、わかっていますよー」

端から見ればわからない会話をする二人。

ミルザムがここに来た理由は一つ、勇者達を助ける為だ。

今後のことを考えると戦力はいくらあっても足りない。

ここでウラドに殺させる訳にはいかないのだ。

そしてウラドも来た理由を察していた。

わざわざここまでできて勇者を殺す理由はないし、そもそも今死ぬ瞬間だった。

ウラドを殺すのはミルザムには不可能、よつてウラドは勇者たちの回収と読んだのだろ

なぜ回収するのかまではわからないが。

そこに、ウラドに念話が繋がる。

「……ちっ」

不機嫌そうにウラドが舌打ちしたとき、この紅魔館から勇者、ミルザム、氷霧はいなくなっていた。

――終わりの時は近い

幕間

「いらっしやいませー」

店員の声が店に響く。

某ファミリーストランに入店してきたのは四人の男。

それぞれ特徴的な、悪くいえば変人のような格好をしている。だが、店員たちはあえて見ないふりをする。

藪をつついて蛇を出すような真似をしたくないから。

四人は一番奥のテーブル席に座る。

「で、ゼロよ、なんの用だ」

男ーロード・ガンが喋る。

「いや、玉には一緒に食事でもどうかなーって」

「野郎だけで食事会とかやだよ」

ゼロの食事という言葉に真っ先に反応したのはデスペアー氷霧ひ憑依し、妖王を消滅させた張本人だ。

「いや、それもそーだけでも」

デスペアの主張を肯定するゼロ。

三人の目が「肯定すんな」という目になる。

「あー、とりあえず食事に来たのだから、飯を頼んだらどうだ？」

老人ー神威が提案をだす。

神威の声に、「それもそうか」とメニューを見る四人。

三分後、店員を呼び出し注文。

ゼロは『リブステーキ』を、デスペアは『ペロンチーノ』を、ロードは『マルゲリータピザ』を、神威は『地中海風ピラフのオーブン焼き』を。

どうでもいいが全員まるで違う料理を頼んでいる。

料理がくるまでの間、雑談をする。

内容は部下が変なことするだの、この前国消したとか、ゲームクリア一時間でしただの。

何処にでもある他愛ない会話。

「ところでゼロよ、そろそろアレ、限界だぞ」

「あー、そっかー」

「つーかこの前異世界召喚あつたけどなに？」

「あー、あれ念のためにだしたやつね」

「お前本当に用心深いな」

「そーでもないよ」

「そーいやそろそろヤバくね？千人もやったんだからいいっしょ」

「あーあれね、あれ転生した英雄持ってたただけだから」

「マジか」

「マジ」

そんな何処にでもある、普通の会話。

「ーなんたることかー」

王が怒鳴る。

宰相が持つてきた報告は、王を怒らせるに十二分なものだった。

内容は『勇者、紅魔館の吸血鬼一匹に敗北』というものだ。

まずい、凄くまずい。

何がまずいかと言うと、勇者の存在を恐れてなにもしてこなかった件の化け物が手をだし始める可能性がある。

化け物だけじゃない、勇者のことをよく思っていない貴族等が「勇者たいしたことないじゃん」と王を責め、勇者を処分しようとすることもあり得る。

勇者側に死亡者が出なかったのが救いか、て王は思う。

「宰相よ、連れた冒険者はどうなった？」

「はっ、一名を除き全員死亡しております」

「……その人物の名は？」

「確か、氷霧零と」

幕門②

「して、次の事だがー」
転生の団。

それは、神により転生させられし者達が集う組織。
十二人の幹部と一人の長が治める組織だ。

元々は身寄りもなにもなく、身を守る為に作られたもの。
そんな組織だ。

「三人の脱走者についてだが」

「どうしようもないんじゃない?」

幹部唯一の女が言う。

三人の脱走者。

それはロード・ガンとミルザム、ミアプラのことだ。

「確かにそうだが……」

この三人に手出しはできない。

したら最悪、この組織が減ぶ。

それほどまでにこの三人は異常だからだ。

いや、異常なのはこの三人じゃない、ロード・ガンだ。

彼は転生者の枠を越えている。

それこそ、この組織の全戦力ー転生者数千人を一瞬で消せる程
に。

封印という、自身を弱体化させる術を受けていなければ、彼を幹部
という器に収めることはできなかつただろう。

そして残りの二人はロード・ガンと行動を共にしていると思われる。
る。

よって手を出すのは不可能ということだ。

だがー面子というものがある。

「アンダレス、君が作っていたものがあつたよね?」

「あつたが……」

「それを使つてくれ」

「……承知した」

もう、後戻りはできない。

◆ 「西洋、か…」

目玉が点在する異空間。

赤く、血に染まったような場所で一人の女性――八雲紫が思案していた。

（西洋には私が望むものがあるかも知れない…）

そう、八雲紫の夢、『妖怪と人間の共存』

それを完璧に実現する手段が、西洋には有るかもしれない。

そう、紫は自身の夢――はつきり言うが『幻想卿』を既に九割型完成させていた。

というか既に、一部の地形を覗けば原作の幻想卿そのものである。

しかし、念には念を、という言葉がある。

「藍く遠出の準備をして〜」

紫の言葉に、何処からか現れた藍が答える。

「遠出って…何処に行かれるのですか？」

「ふふ、剣と魔法の世界、西洋よ！」

◆

「ハッハッハッ！どうしたどうした?!その程度か?!」

「言うじゃない…!」

太陽の畑。

元は向日葵が咲く、美しき場所。

そんな美しき場所が、地獄のような世界に作り変えられていた。

犯人はこの畑の所有者、『風見幽香』

そして、何処からともなく現れた邪神を自称する存在

規格外の化け物二名の戦いが、美しき畑を地獄へと塗り替えた。

「消えて無くなれ！魔力砲！」

「ファイルマスタースパーク！」

全てを殺す即死のレーザーを邪神が放つ。

それを幽香が全てを消し飛ばすレーザーで相殺する。

両者の力は、拮抗していた。

「フハハ！やはりUSCの名は伊達じゃないな！」

軽口を言いながらも、両腕から魔法レーザーや炎等を放つ邪神。

「その言い方：凄くムカつくからやめろ！」

対して幽香も、日傘でレーザーや氷等を弾きながら言い合う。

急に、邪神が攻撃を止める。

それになにか察したのか、幽香も攻撃を止める。

「時に風見幽香よ、世にも珍しき、この世界にたった一つしかない花の種を知っているか？」

パンパン、と邪神が喋りながらテを叩く。

すると一瞬、なにか膨大な力を感じたと思ったら、太陽の焔が元に戻っていた。

文字通り、元の美しき焔に。

そんなことが起こったのに、幽香は気にしてないように話す。

「あら、それは気になるわね。何処にあるの？」

「それは西洋にある。剣と魔法の異界、西洋にある」

邪神は、口元を歪めながら、言った。



「やあやあやあやあ！始めまして蓬萊人さんたち！」

人々が迷いの竹林と呼ぶ竹林の奥深く。

その常人なら決してたどり着けない場所にある館で五人の人間が会話をしていた。

二人は勿論皆ご存知八意永琳と蓬萊山輝夜の二人。

そして残り三人は誰かと言うと、守谷諏訪子と八坂神奈子。

そして最後の一人はと言うとゼロ・グレイルであった。

何故彼等が一緒にいるのか。

簡単に説明すると、守谷の二人はゼロの仲間になったのだ。

正確には違うが。

「で、もう一度言うけど、彼に会いたくないの？」
ゼロが言う。

ゼロが言う彼とはここにいる人物全員が馴染み深い『氷霧 零』のことだ。

「会いたい、けど…」

怪しすぎる。

それが永琳たちが感じた、ゼロに対する印象だ。
というか出会いが最悪過ぎた。

誰が食事中に天井からよきつと出てくると思うのだ。

更にいきなり「氷霧君のこと知りたい？」等と言ってくる。

頭可笑しいんじゃないか。

「まあまあ、そこまで気にしなくていいよ、別に俺の言葉が嘘で、騙されたとしてもいいと思うよー」

そんな軽口を言ってくる。

確かに、氷霧云々はともかく、西洋には行きたいと永琳は思っていた。

理由は単純、西洋独自の技術だ。

西洋には、月にも、この地方の地上にもない技術があると言う。

それを見てみたかったのだ。

が、月からの刺客を考えると、この迷いの竹林からでるのは下策も下策。

迷いの竹林から出たら最後、月に捕まりゲームオーバー。

「あ、そこから変はこつちでどうにかするから問題ないよ」

ゼロが永琳の思考を読んだのかように答える。

「具体的には」

「月に俺特性のコンピューターウイルスをばらまく。

それで月にある機械関係は全ておじゃん。

霊力こみのハイブリッドもこれで壊れる。

更に適当な妖怪を各地に襲撃させる。

これで月は復旧に時間をとられるから監視の目は一時的に消える。

完璧…とは言えないけどいい作戦だろ？」

「それ、実現で」

「できるよ、現にここに転移してきてるじゃん」

ド正論。

ゼロが言った通りこの迷い竹林には幾つもの術式が掛けられている。

入って来たものを惑わす幻術。

外部から見られないようにする防壁。

内部への侵入をそしする転移障害。

その他、永琳が作った侵入障害の術式等。

それら全てをゼロは軽く突破してきたのだ。

永琳に感知されることなく。

「ねえ、永琳、行きましよ」

「姫様…」

輝夜が後押しするように言う。

「はあ…わかりました」

「お、ついてくる気になった?」

「ええ」

「それは良かった」

——一瞬、ゼロの口元が醜く歪んだことに、永琳は気付かなかった。